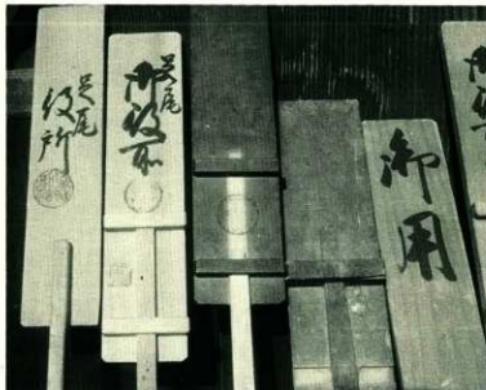


群馬県歴史の道調査報告書 第1集

足尾銅山街道



1978

群馬県教育委員会

資料	文化財保護課保管
No. 55-155	昭和55年6月14日

序

道という言葉から、道路を想起するだけでなく、武道とか書道といった精神的なものを考える人も多いでしょう。伯夷・叔齊の故事をひくまでもなく、道は社会的存在にとって根源的な機能を果してきました。「けものみち」とかわりのない道をもった古い社会から、「すべての道はローマに通ず」といった政治的・軍事的に意味の深い道をもつ社会とか、道はその社会を最も具体的に表現する顔でした。人間や社会の結合機能を果たしてきた道は、本来的に人の能力（例えば、歩く速度、荷物などの運搬能力、歩く距離、等々）を尺度として形成されてきました。道巾、並木、宿場、^{みちしやべ}道標、常夜燈などはそれを端的に示しています。ところが、最近のモータリゼーションの発達は、道の尺度を車の機能に合わせるという大転換をもたらしてしまいました。長い間人のためにあった道が、車のためにという変化をしいられています。

歴史の道という表現には、人の道とそれにかかる生活が過去のものになっていく危惧を訴えるものがあります。群馬県が国の補助を受けて、本県の歴史と深い関係をもつ古い道を調査し、その結果によっては重要な地区に保護の光をあて、県民のみなさまによって積極的利用のできる整備をしようと考えたのは、失なってはならない人間尊重から出発しているわけです。どんなに発達した社会でも人間が無視されたのでは意味がありません。昭和53年度には、日光例幣使街道と足尾銅山街道の2道を対象として調査を実施しました。このたび、その結果がまとまりましたので公刊いたします。本来の姿からみるとほとんど変化しておりますが、一部には当時をはっきり知らせる文化財もよく残されています。読者と共に今後どのようにしたらよいか十分考えてみたいものです。みなさまの今後の研究資料として本書が広く活用されることを念願しております。

末筆ですが、調査ならびに資料作成に御尽力をいただきました調査員の方々、関係市町村教育委員会、および御協力いただきました地元のみなさまに、心から深謝申しあげます。

昭和 54 年 2 月 1 日

群馬県教育委員会

教育長 山川 正

目 次

序

教育長 山 川 武 正

目 次

歴史の道調査実施要項	1
I 足尾銅山街道概観	2
1. はしがき	2
2. 銅山の発見	2
3. 足尾銅山の盛衰	3
4. 銅山街道の設定	4
5. 繼立の道法と賃錢、資料	5
II 道の確定	9
写真集	11
地図	21
III 文化財等の説明	32
1. 銅街道と地形	32
2. 前島河岸	32
3. 岩宿遺跡	32
4. 大間々扇状地の扇端湧水群	33
5. 笠懸野の新田開発と岡登用水	33
6. 神社	34
7. 寺院	37
写真集	41
IV 銅山街道関係略年表	51
あとがき	52

歴史の道調査実施要項

1. 目的

古来、人々や文物の交流の舞台となってきた古い道や水路は、生活や文化を理解する上で重要な意味をもつものであるが、並木街道や関所跡として部分的に指定された史跡等を除けば、開発その他によって急速に失われてきている。

そこで、これら「歴史の道」ともいるべき由緒のある道や水路とそれらに沿う地域に残された文化遺産を調査し、周囲の環境を含めて総合的・集約的に保存整備し、県民による積極的な活用に資することを目的とする。

2. 調査主体者

群馬県教育委員会

3. 調査の方法

(1) 指導

調査の方法・計画・まとめについては、文化庁係官より指導を受ける。

(2) 総務

調査の計画・運営・地元との調整等、全体を総括する。

県教育委員会事務局管理部文化財保護課長並びに担当職員。

(3) 調査員

県内の学識経験者等から選任し委嘱する。

丸山知良 県議会図書室長

沢口 宏 太田女子高等学校教諭

青木 宏 伊勢崎東高等学校教諭

品川 久 前橋女子高等学校教諭

石原純一 伊勢崎女子高等学校教諭

矢島宣弘 伊勢崎女子高等学校講師

(4) 調査協力機関

高崎市教育委員会、伊勢崎市教育委員会、太田市教育委員会、境町教育委員会、尾島町教育委員会、新田町教育委員会、藪塚本町教育委員会、大間々町

教育委員会、玉村町教育委員会、笠懸村教育委員会、黒保根村教育委員会、東村(勢多郡)教育委員会。

以上、3市6町3村。

(5) 調査方法

○ 1次調査

関係市町村の協力を得て、調査対象の旧街道の路線と現状との異同の概略を把握する。

○ 2次調査

1次調査の結果を参考にして、調査員による現地調査を実施する。

(6) 調査対象

昭和53年度は、銅山街道と日光例幣使街道とする。

(調査事項)

④ 道・河川・運河等及びこれらに沿う遺跡、例えば一閑・番所・一里塚・宿場・本陣・脇本陣・庄屋等屋敷・御茶屋・詰所・御仮屋・城館・陣屋・奉行所・古戦場・会所・並木・石疊・橋梁・隧道・常夜燈・道標・地蔵・道祖神・井戸・河岸・渡船場・波止及び歴史的名所(社寺・札所・靈場・温泉・宿坊等)・名勝(庭園等)の分布状況と保存の実態。

⑥ 無形文化財・民俗文化財・天然記念物の分布状況と保存の実態。

⑦ 道・運河の歴史的意義・格・沿革。

⑧ 河川の歴史的変遷。

⑨ 沿線に設置されている博物館・郷土館・資料館・史料館などの公開施設の実態と問題点。

⑩ 江戸時代の国界・藩界(正保・元禄・天保)及び郡名。

4. 調査のまとめ

報告書は、A4版サイズとし、道、運河ごとに分冊とし作成する。

保存資料は、地図・写真・その他とし、文化財保護課に保存し、県民の利用に供する。

I 足尾銅山街道概観

1. はしがき

足尾銅山が室町時代後期から江戸時代初期にかけての時代の変化の中で、発見され開発され、その重要性を認識されたことにより、江戸幕府の直轄領として銅山奉行あるいは幕府代官の支配のもとに入った。

銅山経営は比較的早い時期の間に足尾の奉行所内で精錬されるようになり、間吹銅として江戸送りにされた。

足尾山中は室町時代まで日光山の支配地だったことからみても日光通りが交通路として普通だったのである。古峯原の信仰もそうした交通路に付随して発生されたものではなかろうか。

大間々宿から渡良瀬峡谷をさかのぼる黒川峠の通りは江戸へ出るということで開発された通りであり、生活圏での往復といった道路から公道としての利用に拡大され、整備してきたものであろう。

足尾銅山から採掘された銅鉱は足尾で精錬されて江戸へ運搬するために街道を設定し、宿送りされるようになった。徳川家康が関東入国した天正18年（1590）、関ヶ原役で大勝した慶長5年（1600）からほぼ半世紀を経た慶安2年（1648）に銅山街道が決定されたのである。

渡良瀬川に沿った峡谷を足尾から沢入（勢多都東村）、花輪（勢多都東村）、桐原（山田郡大間々町）、大原本町（新田郡藪塚本町）、亀岡（新田郡尾島町）の5ヶ宿に銅蔵を建て継送りしたのである。ここから利根川を舟送りした。

河岸は平塚河岸から前島河岸に替っている。時代の変化は河岸をもえてきたのであった。

この道路を「銅御荷物附送り」する道路として、「銅山街道」という文字を古文書も使用している。普通に呼ばれているのは「あかがね街道」という。銅街道あるいは銅山街道と書いても「あかがねかいどう」と呼んでいたものであろう。

街道添いの村々に住んでいるものは「往還（おうかん）」といっていた。普通名詞であるが、街道の重要な

ことが自然とそうしたことばで表わされたものと考えられよう。

ここではあくまで銅が主役であり、銅山にかかわりのある足尾御陣屋御用といった荷物送りが付いてまわるのである。宿駅では銅問屋があり、銅蔵が建立された。

普通の街道のような人間の往来は従と考えられていたものであろう。

2. 銅山の発見

足尾山中に銅鉱を発見したのは室町時代のことであろう。あるいはもっと古いことであろうか。しかしこの銅を精錬し利用するようになったのは室町時代後期になってからであろう。こうした銅山発見を更に意義深いものにするための演出がなされたと考えられるのである。

即ち、花輪宿高草木家文書はその間の事情を次のように伝えている。（資料①）

足尾山中に住んでいる百姓治部と内蔵という2名の者が慶長15年（1610）に足尾銅山を発見したというのである。両名は花輪村の弥右衛門と沢入村の十右衛門にこのことを告げ、一同して同地の支配者である日光山の座禅院の座主に採掘の許可を求めたのである。そこで翌16年には間吹銅という精錬された銅を酒井雅樂頭の取次ぎによって江戸幕府に献上した。酒井雅樂頭は前橋藩主であり、幕府の老中として活躍していた。

当時は徳川家康も健在で、將軍職は秀忠になっていたが実権を掌握していた時期であり、丁度3代將軍となつた家光の持つての式があげられる年であった。

間吹銅の獻上はあかがねの新しい出現ということで幕府徳川家の繁栄と御代が長く久しく続くことを象徴するものとして喜ばれ、足尾は幕府直轄の御用山とされたのである。

徳川家の吉祥にこと寄せた伝承を作り出したと思われる。即ち、室町時代に既に知られていたと考えられる事例をいくつかあげてみれば、次の5点ほどになろう。（『足尾郷土誌』その他による）

(1) 永禄2年(1558)に赤沢村伝右衛門が日光の善如寺から金15両を借用した理由として「銅山鉱取拡入用諸色仕入金」、あるいは「盆前に銅吹立」とある。この年には銅山を採掘し鉱道を拡張するための資金を借りて、盆前に銅の精錬をしておきたいというのである。

(2) 天正18年(1590)に秀吉が日光座禅院に与えた朱印状に既に銅山のことが記されている。

(3) 慶長16年に銅山奉行藤川庄次郎一行が始めて銅山を臨検した時に、既に数十の旧坑口があったといふ。

(4) 足尾の人口は弘治年間(1555-58)に足尾山内14ヵ村で合計250戸足らずであったのに、天正ごろに赤沢、松原2ヵ村で500戸あったと伝えている。特殊な事情がなければこの様な急増を招くことはあり得ないので、この頃に銅山の開発が始まつたと考えられる。

(5) 佐野和泉守の子内匠助は佐野宗綱によって足尾銅山奉行を命ぜられ、足尾へ行っていたという。慶長2年峯岸三弥は宗綱の弟了伯によって召出され、足尾銅山方を命ぜられたが、慶長15年には佐野に帰ったといふ。

足尾銅山は佐野の天命の鉄物師技術を持つ武士團によって開発されてきたものであろう。その事実を重視し、重要な価値を認めた幕府中枢にいた酒井雅楽頭は、家光の着式の式に祝事として準備し、間吹銅といふ精錬された輝やかしい銅をもって飾つたのであった。かくて幕府の経済的発展を目にする耳にふれて感じさせる演出だったのである。

治部と内蔵といふ百姓らからざる名前の両名を登場させ、徳川家の祝事にこと寄せて幕府の直轄地足尾銅山が正式に誕生したのであった。

3. 足尾銅山の盛衰

街道の盛衰は一重に足尾銅山の盛衰にかかっていることは明らかである。銅山経営は幕府直轄であるといつても時代の変化にともなって経営方法が変化する。一応ここで簡単にこうした変遷にふれておきたい。

幕府の支配となった慶長15年以前には佐野の天明の技術者が入山していたことを前に記した。その他に

播磨国 山崎治兵衛、近藤五郎右衛門。

備前国 高橋清右衛門。

の3名が山先名代を引き請けて大金をもうけて帰国したことが伝えられている(寛文3年、花輪村高草木家文書)。この3名の名前は他の資料では播磨国、山崎治兵衛につづいて高坂清右衛門と吉田太郎右衛門の3名となっている場合がある。これらの名前はとにかく慶長15年以前から山先名代という山師の請負業者として採掘していたということである。この採掘方法では採掘された銅鉱を商人売渡によって貢租を課するのみで、直轄の経営といふわけにいかない。第1代の銅山奉行である藤川庄次郎は慶長19年に大阪冬之陣がおこった際に銅によって得た300両を銅山師に渡し、究竟の入足をそろえて大阪へ出陣したと伝えている。

この経営方法に眼を付けた日光大僧正天海は寛永4年から正保4年までの21年間にわたりて銅山経営にのり出し、京都町人鷹屋庄兵衛と奥田孫兵衛の2名に採掘させ、丁銅に精錬したものを勝手に商人に売払わせることにより収入を得ていた。この方法はこれまでの請負契約による銅山経営がつづいていたということである。天海は寛永20年に没しているから没後4、5年間はそのままに経過したのであった。

慶安元年から諸星庄兵衛が銅山奉行兼代官として着任した。これは足尾銅山にとって一つの転期となつた。

慶安元年(1648)3月18日に御上使(幕府の使者)として酒井讚岐守と秋元但馬守が上野(東畠山寛永寺)に行っている。酒井讚岐守は若狭国小浜藩主酒井忠勝で幕府の老中から大老を勤めている。秋元氏は上野国總社藩主から甲斐国(山梨県)谷村藩主へ転封し、日光造営奉行として活躍した。

この時に足尾銅山は今後、幕府の「御台所御用山」に仰付けられたので、幕府によって丁銅に仕立てて、浅草の御藏入に御付けられた旨を伝えている。

銅山奉行兼代官である諸星庄兵衛は銅の採掘から精錬をして浅草の御藏入から保管の責任まで持つことになったのである。

このことから翌、慶安2年に銅山街道が設定されるのである。

さて、慶長19年(1614)に足尾銅山に住み、採掘にあたっていた人数は

1. 野州 足尾銅山 鉱掘100人程

小百銀山 掘鉱 30人程

徳次良金山 同 15人程

(諸国金銀銅山々写之事、慶長19年7月15日)

である。

寛文2年(1662)から7年間は毎年銅9万貫を江戸浅草の倉庫に納めた。延宝4年(1676)から12年間は溶鉱炉を32座設けて、毎年35、6貫から40貫を吹立てた。この銅は長崎へ送られ、長崎港からオランダへ輸出された。これら取扱いは江戸、大阪、長崎の3ヵ所の会所で行なわれたので銅山師は詰切りで仕事に当ったという。足尾の最盛期を画したといつてもよいであろう。この頃の足尾の銅山師は44人、吹床主は12軒、溶鉱炉は90座を数えたという。

このような足尾の全盛は日本経済にとっても重要な役割をはたしたのであるが、一面には鉱山も荒廃してきた。次第に鉱道も伸び、採掘するのに困難な場所となってくるのである。

宝永5年(1708)には江戸城内の普請のために銅瓦を製造した。足尾で銅板に延ばして1,286,450枚を納めた。続いて日光山内のお宮とお寺の各堂塔に使用する銅板は莫大な数にのぼったと伝える。

なお、前後するが元禄13年(1700)には

棹銅	13,824貫
銅瓦	47,479貫700目
丁銅	18,976貫100目
鉛銅	1,979貫400目
計	82,259貫200目

であった。(龜岡高木家文書)

その後、享保3年(1718)4月10日に足尾千軒といわれた町屋が焼失し、8月までに借用した金が8千両に及んだ。これは同6年に返済している。銅の売価の上昇などにより保護政策がとられたが、足尾山元の困窮がつづき、铸錢の座がつくられ3万貫の銅を使って4万貫の足字銭寛永通宝を铸造した。これは約2千万枚の銭となった。幕府の保護政策によって足尾銅山は活動していくが1年に約3万貫の産額を維持するのがやっとだった。

寛延4年(1751)には銅山師43人、作業員533人が1,500ヵ所程の切羽をもっていた。しかし、弘化元年(1844)には銅山師は5人に減少した。銅山奉行、代官の氏名は資料②の通りである。

4. 銅山街道の設定

銅山街道の設定は慶安2年(1649)であった。足尾は日光山の座禅院が管理していたから、銅山発見までは日光から峠越えで往来することが多かったであろうと推察する。銅の精錬は比較的初期からこの地で実施されていたと考えられる。銅鉱のまま輸送するには距離があり、困難だからである。

銅山の幕府の直轄経営が軌道にのった慶安元年の翌年に街道決定がなされると、足尾銅山から5宿の継続りとなり、利根川を下って江戸浅草の御藏入りとなるのである。

銅問屋は自家用の倉庫を銅藏としていたが、明暦2年に幕府の費用で修復された。新築したということである。

その問屋名と銅藏の規模を表示する。

○御用銅問屋(寛保2年)

宿	問屋名	銅藏	藏敷
沢入宿	松嶋 十郎治	長5間×横2間	6畝
花輪宿	高草木弥右衛門	6間×2間	1反2畝
桐原宿	藤生忠右衛門	5間×2間	6畝
大原宿	西庄村左衛門	4間×2間	一
亀岡宿	高木十左衛門	4間×2間半	5畝

これらの宿にそれぞれ役郷村が決定されていた。その役郷村を表示してみよう。(天保14年文書)これが普通いうところの助郷村である。

沢入宿	沢入村	211石2斗7升5合
	草木村	236. 8. 0. 3
	座間村	127. 7. 7. 9
	神戸村	366. 9. 8. 2
	小中村	195. 2. 7. 8
	小夜戸村	332. 3. 4. 0
計		1,470. 2. 5. 7
花輪宿	花輪村	547. 7. 3. 7
	荻原村	261. 9. 4. 1
	水沼村	210. 9. 1. 1
	上田沢村	472. 4. 0. 7
	上神梅村	267. 9. 0. 2
	下神梅村	186. 9. 0. 3
	塩沢新田	49. 1. 7. 8
計		1,996. 3. 0. 9

桐原宿	桐原村	354. 1. 1. 0		前小屋村	199. 6. 3. 5
	蕪町村	73. 0. 7. 1		押切村	446. 4. 4. 6
	天王宿村	217. 0. 2. 4		阿久津村	117. 3. 9. 0余
	下新田村	274. 1. 7. 5		仲野村	29. 1. 7. 6
	上久方村	97. 7. 4. 0	計	9,290. 4. 2. 3余	
	天沼新田	360. 0. 0. 0	龟岡宿	575. 3. 9. 5	
	新井村	208. 7. 7. 9余		大館村	735. 6. 3. 8
	阿左美村	1,748. 6. 9. 4	計	1,311. 0. 8. 3	
	阿左村	1,021. 6. 4. 5			
	鹿川村	306. 6. 6. 6			
	鹿波村	80. 7. 1. 6	5. 繼立の道法と貨銭		
	志加村	221. 7. 0. 2			
	香林村	338. 8. 6. 4			
	間野谷村	280. 9. 8. 8			
	久々宇村	127. 4. 3. 7			
	桃頭村	149. 8. 2. 7余			
計		5,861. 4. 3. 8余			
本町宿	大原本町村	1,273. 6. 7. 2			
(大原)	国定村	568. 7. 2. 4			
	上田村	100. 0. 0. 0			
	権右衛門村	77. 1. 7. 5			
	上中村	50. 0. 0. 0			
	上中新田	41. 2. 7. 7			
	瀬池村	51. 5. 5. 0			
	大 村	190. 5. 1. 7余			
	六千石村	220. 5. 8. 4			
	新野村	124. 5. 6. 6余			
	村田村	23. 9. 9. 8			
	曲沢村	120. 0. 0. 0			
	小金井村	1,690. 0. 1. 3			
	菅塙村	66. 3. 2. 5			
	西野村	182. 8. 3. 2			
	戸塚村大組	779. 5. 6. 9			
	同 小組	692. 9. 1. 7			
	武藏島村	233. 8. 1. 6			
	平塚村	911. 2. 8. 1			
	八木沼村	482. 7. 8. 7			
	女塚村	76. 8. 2. 6余			
	三ッ木村	180. 9. 1. 2			
	前嶋村	79. 5. 7. 5余			
	鳴村	284. 8. 5. 7			

宝暦年間の記録により道法と貨銭をみよう。足尾から沢入まで2里半。沢入から花輪まで3里半。花輪から桐原まで3里。桐原になる前には大間々宿の高草木家が銅問屋であったが延享3年に前橋藩領に編入されたので桐原に変更され、桐原の藤生家が銅問屋をつとめることになった。

桐原から本町(大原)まで2里余。本町から亀岡まで3里17町。銅蔵から河岸場まで積場上通り7丁程、下道では12、3丁程である。

江戸時代の長い間に道路の変更があつても道法にはそう長短はない。

貨銭は足尾から沢入まで銅1箇について駄賃水1文5分。花輪から桐原まで12文1分。桐原から本町まで7文1分。本町から亀岡まで11文1分。

天保14年の記録からみれば次の通りである。

銅箱3箇についての駄賃。足尾から沢入まで32文8分3厘8毛。沢入から花輪まで28文5分5厘8毛。花輪から桐原まで30文4分1厘7毛。桐原から本町(大原)まで16文2分6厘7毛。本町から亀岡まで24文9分4厘。

積荷は舟積みされる。40箇から50箇まで金2両。51箇から70箇まで金2両2分。71箇から100箇まで金3両。101箇から250箇まで3両1分2朱。

書状や先触、または銅以外の継送りに使われる人馬貨銭は別に決められている。

沢入、足尾間の人足1人銭60文、馬1匹銭106文。沢入、花輪間の人足72文、馬126文。花輪、桐原間の人足72文、馬126文。この足尾から桐原までの間は本馬1匹は馬2疋で勤めさせている。本馬、軽尻の差はない。

桐原、大原間は人足48文、本馬1匹80文。軽尻1匹64文。大原、亀岡間は人足80文、本馬1匹144文、軽尻

116文となっている（宝暦年間）。

資料①

一、野州足尾銅山草創者、慶長十五庚戌年、同所百姓治部申者、内藏申者、見出、花輪村弥右衛門、沢入村十右衛門一同、日光座禪院座守江申立、翌亥年、酒井雅樂頭様御取繼以、間吹銅差上候處

御神君様御治世

大猷院様御持着御祝儀御當日、間吹銅獻上、其節御

代長久、吉事之銅山々、御褒詞之御上意被成下置、夫々御用山々被仰付候、銅一式御用之儀、銅山師共々被仰付候段及聞候事、播磨國山崎治兵衛、高坂清右衛門々申者罷越、山先名代吉田太郎右衛門儀々山先相勤、十文字鍔御免無高ニ而江戸表之儀々披官格ヒ（被）御付候由々御座候

〔足尾銅山御掛御役人姓名控、花輪、高草木」から〕

資料②

代	銅山奉行名	期間	備考
1	藤川庄次郎	慶長15～慶長19 5年	銅山師稼
2	小林重郎左衛門	元和元～寛永元 10年	留山
3	小林彦五郎	寛永2～寛永3 2年	留山
4	日光大僧正天海	寛永4～正保4 21年	大僧正賣上、商人売
5	諸星庄兵衛	慶安元～寛文元 13年	御用山
6	近山五郎右衛門	寛文2～寛文7 6年	出銅9万貫
7	岡登治郎兵衛	寛文8～貞享4 20年	出銅35万貫
8	諸星伝左衛門	貞享4～元禄2 3年	長崎銅
9	池田新兵衛	元禄2～元禄15 14年	
10	野田三郎左衛門	元禄15～正徳3 12年	
11	池田喜八郎	正徳3～享保元 4年	正徳4年銅山普請
12	久保田作次右衛門	享保元～享保6 6年	享保3年大火
13	池田新兵衛	享保7～元文4 19年	
14	早川安左衛門	元文5～延享元 5年	
15	幸田善太夫	延享元 1年	
	木村雲八		
16	田中八兵衛	延享元～寛延2 6年	
17	野呂猪右衛門	寛延3～宝暦6 7年	
18	吉田久左衛門	宝暦6～宝暦7 2年	
19	横尾六右衛門	宝暦7～宝暦9 3年	
20	横山伝右衛門	宝暦9～宝暦10 2年	
21	平岡彦兵衛	宝暦10～宝暦11 2年	
22	久保平三郎	宝暦11	
23	内方鉄五郎	宝暦11	
24	鶴飼左十郎	宝暦12	
25	遠藤久右衛門	明和8	
26	飯塚伊兵衛	明和8	
27	布施弥市郎	明和8	
	川崎市之進	明和8	

28	川崎	平右衛門	安永7
29	岩佐	石藏	寛政4
30	岸本	武大夫	寛政5
	田島	安藏	
31	布施	孫三郎	寛政6
32	桶垣	藤四郎	寛政12
33	古橋	隼人	文化6
34	吉川	栄左衛門	文化10
35	山本	大膳	文政7
36	関保	右衛門	天保13
37	林部	善太左衛門	天保13
38	設樂	八三郎	安政2
39	小林	藤之助	安政2
40	川上	金五郎	安政3
41	伊奈	半左衛門	安政4
42	小松原	甫三郎	文久3
43	中山	誠一郎	元治元
44	木村	甲斐守	慶応元

資料③

乍恐以書付奉申上候

東通花輪村元御用銅問屋高草木主一郎奉申上候、私所持御用銅藏起立可奉申上旨被仰付承知奉畏左ニ奉申上候

此段野州足尾銅山草創之儀者、慶長十五庚戌年相始候、徳川家御用山ニ相成、慶安二丑年右銅繼送り被仰付候ニ付、私所持之土藏江積込請弘罷在候處、元来古藏故及破損候ニ付其段申立、明暦二申年ニ至御手元御入用を以御修復被成下候趣、人馬遣方之儀者隣村之内勝手次第遣来候得者定リ候村方無之候而者差支候儀有之、依之足尾銅山御用帳ニ唱寛文年中新田郡ニ高三千五百石余、山田郡五ヶ村、勢多郡拾弐ヶ村、高四千九百五拾石、其後度々增高有之、都合毫万九千九百石余、村數五拾九ヶ村足尾銅山役郷村ニ相定リ、其以来者右御藏御修復其外入用共役郷村々御取立ニ相成申候、右御尋ニ付聊相違不申候、以上

明治四未年二月

右花輪村

元御用銅問屋 高草木主一郎

百姓代 尾池 八重郎

組頭 石原 伝平

名主 古美門 権衛

御支配

御役所

野州足尾銅山御陣屋并五ヶ宿問屋前

入用之儀ニ付役郷村々立会名主順番定書

野州足尾銅山御陣屋并五ヶ宿問屋前諸入用役郷割之儀先達而御札之上当四月 石谷備後守様於御奉行所御裁許被仰渡候ハ以來御陣屋新規御修復其外入用等之儀度々間屋役郷定惣代并ニ直右衛門役郷村々名主順番定置老人宛立会相改御陣屋詰御手代中諸事御差図を請取計其外ハ仕来之通可仕被仰渡候ニ付以来順番名主罷出候儀ニ付村々同一左之通相談相究候事

一、役郷入用之儀七月十二月迄ヶ年兩度宛割合御座候ニ付十二月五六月迄順番老人七月五十一月迄老人迄ヶ年兩人宛ニ相定夏割之節罷出候者七月より相勤候所順番名前御陣屋江御届ケ可申上候尤順番之儀者勢田郡ち山田郡新田郡佐位郡村順ニ相究置替り之節勤方之書付次村江相送り尤前割之節跡江残り候儀者具ニ跡番之者江可申送事

一、御陣屋并五ヶ宿御普請其外諸道具大破之式

季役割之節不依何事順番之もの了簡ニ不決役
村々江及相談候儀者各別立会順番名主相究候義何連
之村方ニ而茂重而不得心之筋決而無之候事

一、順番名主足尾江罷出候雜用之儀其村限之入用ニ致
候而者村高之高下御用之多少ニより入用甲乙可有之
間順番之者雜用之義も問屋定惣代之入用ニ准シ役割
割ニ加工可申事

但雜用貢數之儀ハ最寄御用銅問屋定惣代入用之並
ニ可致事

右之通申合候上者足尾御陣屋并五ヶ宿御用銅問屋前入
用役割掛り之儀順番ニ罷出候者立会見届ケ割合相済候
ハ村役人者勿論小前百姓迄不得心之筋無之重而難渉ケ
間鋪義一切申間鋪候依之連印書付仍而如件

明和九年辰四月 上野國勢田郡

沢入村名主 治左エ門

(以下略)

(各村の名主、組頭、百姓代の連署押印あり略して村

名のみを以下記す)

勢田郡 沢入村、草木村、座間村、神戸村、小中村、
小夜戸村、花輪村、荻原村、水沼村、宿郷村、上
神梅村、下神梅村

山田郡 桐原村、大間々村、蕪町村、天王宿村、下
新田村

新田郡 鹿田村、鹿川村、久字村、桃頭村、阿左美
村、本町、轄塚村、西野村、寺井村、新野村、小
金井村、村田村、市野井村、沖野村、西野谷村、
阿久津村、押切村、前小屋村、前嶋村、武藏嶋村、
亀岡村、大館村、平塚村、八木沼村、三ツ木村、
女塚村、菅塙村、境村

佐位郡 鳴村、国定村、間野谷村

足尾

御役所

〈丸山知良〉

II 道の確定

1. 足尾～沢入間 2.5里

足尾より沢入トンネルまではほぼ国道と一致している。地形的には左右両岸ともかなり険しい。途中で渡良瀬川を渡渉することがないのは対岸に渡ってもメリットがないことによると考えられる。左岸には山間部の渡良瀬支流としては最大の黒坂石川が流入すること、銅山、沢入宿とも右岸にありこの間左岸に集落がないことなどむしろマイナス点が多い。沢入トンネルの手前から山の手側に上りトンネルの上を通って再び国道沿いに戻ったが国道よりやや下を通っていたといわれるが土砂の堆積場になっており不明。沢入地内の三叉路信号を左手に入りて国道と分かれ銅藏に入った。

2. 沢入～花輪間 3.5里

沢入の銅藏より南下し落居で渡良瀬川の河岸段丘を下る。ここからやや西に進んだ地点より草木ダムの水没地内を通った。草木ダムの下を通って神戸地内に達する。神戸の集落内では国道から南にはづれて集落内を蛇行し、小中に達する。小中付近からは対岸にも街道として使われた道が残っている。渡渉点の詳しい位置は不明。これより下流域で何回か対岸にルートがみられるのは右岸から比較的大きな支流が流れ込み、しかもそれがかなり深い谷をなすためにその迂回路として設置されたと思われる。小中駅の西北で小中川を渡り国道に沿って進む。柳平、三ヶ郷間で現国道をはずれ山手側を通り、三ヶ郷で再び国道に出、中野に至って国道から離れて河岸段丘を下り花輪宿に至る。一方左岸ルートは2万5千分の1の地形図で松島と記されている付近から下小夜戸、大畑を経由して小黒川の対岸まで続く。途中中野に至る地点に右岸への渡渉点がある。

3. 花輪～大間々（桐原）間 3里

花輪を出た街道は小黒川の河口付近で2手に分かれ。1つは西行して小黒川沿いにすすむ道で前期（時

代不明）に利用されたといわれる。小黒川に沿ってゆくと関守りで行き止まりとなり川を渡って急坂へかかる。登りきって舗装道路を横切り杉林の中の道を再び登りつめると清水に出る。集落の中を通る舗装道路をはずれて右手に入り屋並を出はずして舗装道路と直交する。関守から清水に至る山中の道は1間巾、街道の山中の基準になっているよう他でもほほ同じ状況である。さらに西に進むと農業用の広い道となるが300m程で右手の狭い道に入り途中小さな溪流を山側に迂回しながら下柏山の赤城神社に出る。赤城神社と老人センターの間の道を下ると道は廃道状況となり、途中に馬頭大士と刻んだ碑（年代記入なし）が1つ山中にあるだけで旧街道のおもかげはない。小溪流を2つ越えてしばらくゆくと赤城東麓の舌状台地上の緩斜面上の畠地に出る。ここから下って城下の集落を通り、城下トンネルで国道に合流する。一方後期（時代不明）に使われた街道は現国道を通じて水沼に至り、さらによつて津久瀬で二手に分かれる。山手側の道は津久瀬の信号で赤城へ至る県道へ入り約300m程登ったカーブ地点で左手に入り国道に平行する形で南下し、城下トンネルの所で国道に合流する。一方国道沿いにすすむ道が主なものであるが道路改修、拡張により街道のおもかげはない。

水沼からの南下ルートについて高草木家文書に「継立村之渡船場之儀者花輪村より桐原村江者深澤通り本道者渡船無之新道と唱候塩沢通り者勢多郡荻原地内宇広瀬渡船山田郡浅原村地内字戸沢渡船二ヶ所御座候」とある。これについては下寒梅の対岸ルートと水沼から対岸の下八木原に渡り越えて塩沢に至るルートを取りたい。

その理由は

- (4) 山中に道祖神（天明元年）、青面金剛（天保3年）馬頭観世音（安政6年）など江戸後期の石造物が多い。

- (5) 塩沢集落の最北端、坂下といわれる地区の水島松次郎氏宅（ここが塩沢の最奥）で明治時代まで旅人を相手の茶屋を営んでいた。

(4) 坂下付近は渡良瀬川が峡谷をなし降水量が多いときにはこの峠越えの方が危険が少ない。などである。

再び本道に戻って城下トンネルから南下し山側に梨木温泉へ登る道に入り本宿に入る。坂を登りきった大きなカーブでガードレールを越え深沢川へ下る。上流に少し巻いて上寒梅に入るが詳細部は不明である。

宿の形をよく残す上寒梅を通り台地を下って国道と合流した地点で再び二手に分かれる。1つは寒梅駅前を通って左岸に渡り七曲溪谷の南端で渡船するルートで平田な道である。他方は下寒梅まで国道を下り右側の焼きトウモロコシ店の裏手を通って山越えする道である。下寒梅から山にかかるしばらくゆくと、山中に小さな祠がある。十二社神社と地元の人達が呼ぶもので戦前までは山仕事に出かけるときには必ずおまいりしたという。さらに登って峠を越えて鶴舎の付近に至るまでを日光坂という。地元の古昔によれば日光という山地名があるからとも、日光に至る道の意ともいう。手振山の集落を経て急坂を下り水源地に至る。この坂を坂峠と呼ぶ。大間々警察署の南で塩沢からきたルートと合流する。ここから南は延享4年までは大間々の本町通り、それ以後は桐原通りに銅問屋があったので前後期とルートが異なる。

4. 大間々～大原本町 2里

大間々の本町通りからのルートは赤城駅の西を通って上毛電鉄の踏切りを渡り、県道に沿って吹上に至る。一方桐原からの道は大間々一前橋線の県道を越えてから吹上げまでの間が不明。吹上げから県道を南下し鹿田山の東側の岡登用水の所で県道から離れ笠懸村農協の東から南の道を通って県道に合流、久宮を経て大原本町まで一路南下する。

5. 大原本町～平塚 3里

元禄年間に平塚の河岸が廢止されるまでのほぼ1世紀にわたって使われた街道である。大原本町を出ても県道を南下し、6千石、金井十字路（太田～伊勢崎線との交叉点）を経て上江田の十字路で尾島町亀岡へ至るルートと分かれ、約200m南下してから西に折れ最初

のT字路を左折して南下すると竜得寺の前を通って自然に県道に戻る。この県道から脇に入った部分を地元の人は大道と呼ぶ。道巾は約2間、銅山街道やその付近に大道と呼ばれるものがこの他2ヶ所あるがいずれも2間巾であるので宿内を除いた部分の平野部の基準巾であったとも考えられる。さらに進むと例幣使街道に合流、西に道を取ると大きなT字路がすぐ出て来る。この付近から南は耕地整理された水田が広がるが、その整備の際田道を廃したため東武線を越えた所で不明。水田内の農耕道路でわかりにくいくらいで世良田駅から線路沿いに西へ行き200m程で南側の道沿いに猿田彦（明治21年）と刻んだ石碑がある。その道を南下すれば街道である。世良田の集落に入るとT字路で突き当たるので右に折れ最初の小さな十字路を左手にゆくと伊勢崎一館林線に出る。角に中華料理店がある所である。これを左手に折れ30m程で南側に三角屋根の寿司屋があるのでそこを南に下り、すぐ先のT字路を右に折れ続いてすぐの十字路を左に折れると東側に東照宮の森が見える。早川を渡って送電用鉄塔を越えた所の変則六叉路で南にみえる赤城神社への道をとればまっすぐ利根河岸の平塚へ出る。

6. 大原本町～亀岡 3里

上江田十字路までは平塚への道と同じである。十字路を東に折れ道なりに進むと赤堀の集落を経由して、木崎に至る。木崎で例幣使街道にぶつかる手前の部分は学校敷地内を通っていたが道がつけかえられているので旧道は歩けない。木崎町内のややづれた十字路をさらに南下し、東武線を越えて木崎駅の前から尾島に至る道と平行して走る集落の西側を通ってゆくと旧岩松家屋敷跡に建てられている尾島女子高校の西から南へと迂回し、石川のあかがね橋を渡る。さらに南下して伊勢崎一館林線をわたり尾島町の屋並の南側に出て新興住宅地を西にとると亀岡の銅問屋の横を通り大道と呼ばれる農道を南下すると早川沿いの河岸跡、前島に出る。

（青木 宏）



足尾銅山



草木ダム



沢入部落付近の旧道



沢入地内旧道



沢入地内旧道



沢入地内旧道



沢入地内二十一夜塔



(沢入) 銅藏跡の石垣



(沢入) 銅藏のあたつた場所



(沢入) 旧道の石畳



(沢入) 旧道にたつ馬頭尊



落居付近の旧道



落居付近の石祠



(神戸) 横性様



(神戸) 双体道祖神



三ヶ郷東の旧道



(神戸) 青面金剛と地蔵尊



(花輪) 馬頭尊



花輪銅藏



(黒保根) 清水山中の板碑



花輪洞藏御用札



(黒保根) 赤城神社付近の旧道



(黒保根) 清水～関守の旧道



(黒保根) 新井～関守の旧道



(黒保根) 下柏山～清水間の庚申様と祠



(黒保根) 城下の庚申塔



(黒保根) 城下の馬頭塚



赤城神社の双体道祖神



赤城神社の双体道祖神



赤城神社付近の刑場あと



赤城神社の二十二夜塔



塩沢の庚申塔



塩沢の庚申塔

塙沢の觀世音菩薩



塙沢の三十三夜塔



塙沢の一十三夜塔



塙沢の谷



大畑付近





(花輪の対岸) 大畠付近



桐原の郷倉



(大原) 全性寺の地蔵尊



(大原) 全性寺の地蔵尊台座の道標



大原の道標(1)



大原の道標(2)

大原の道標
(3)



大原の道標
(4)



(上江田) 大道付近

(上江田十字路) 三面の金剛像



早川付近の石幢に彫られた地藏尊



早川より長樂寺方向の旧街道





世良田の庚申塔

(平塚) 赤城神社の道祖神



(平塚) 二十三夜塔と庚申塔

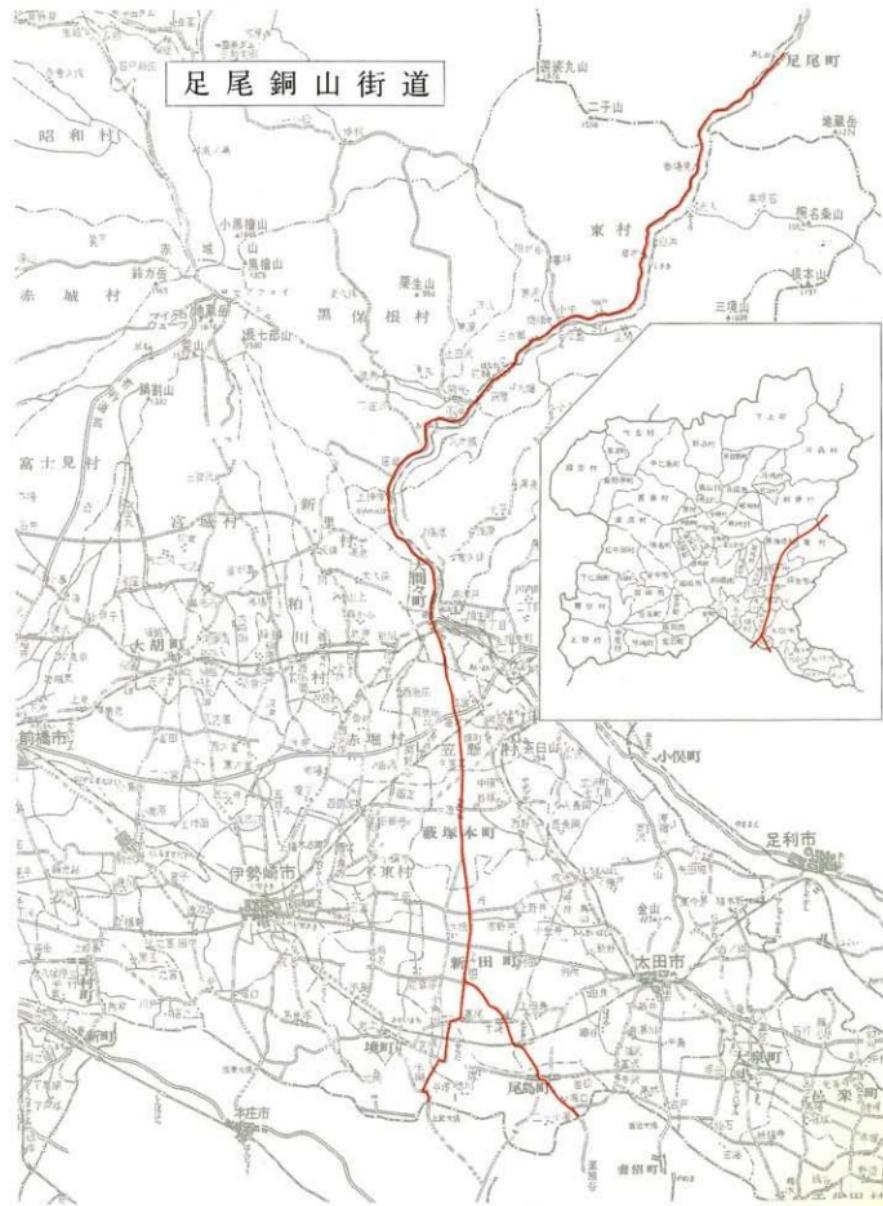


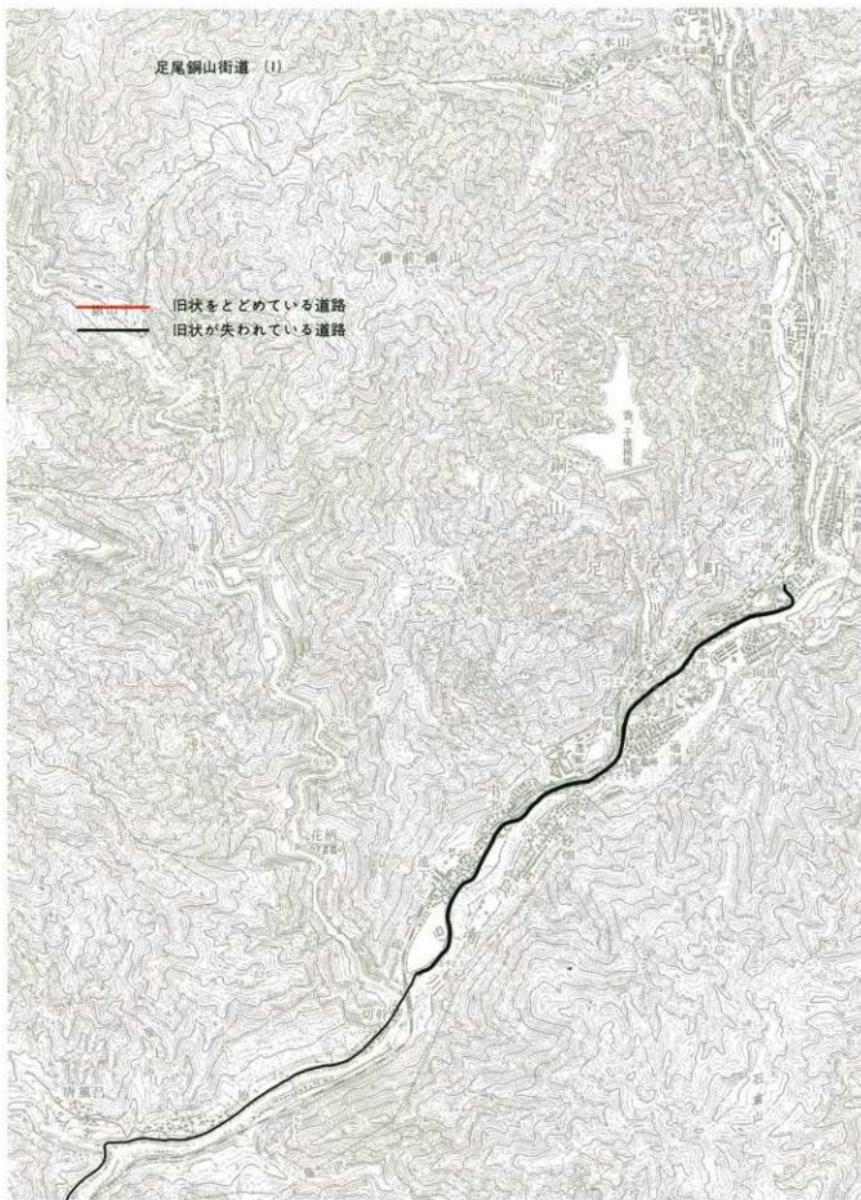
(下田島) 双体道祖神

龜岡の銅藏

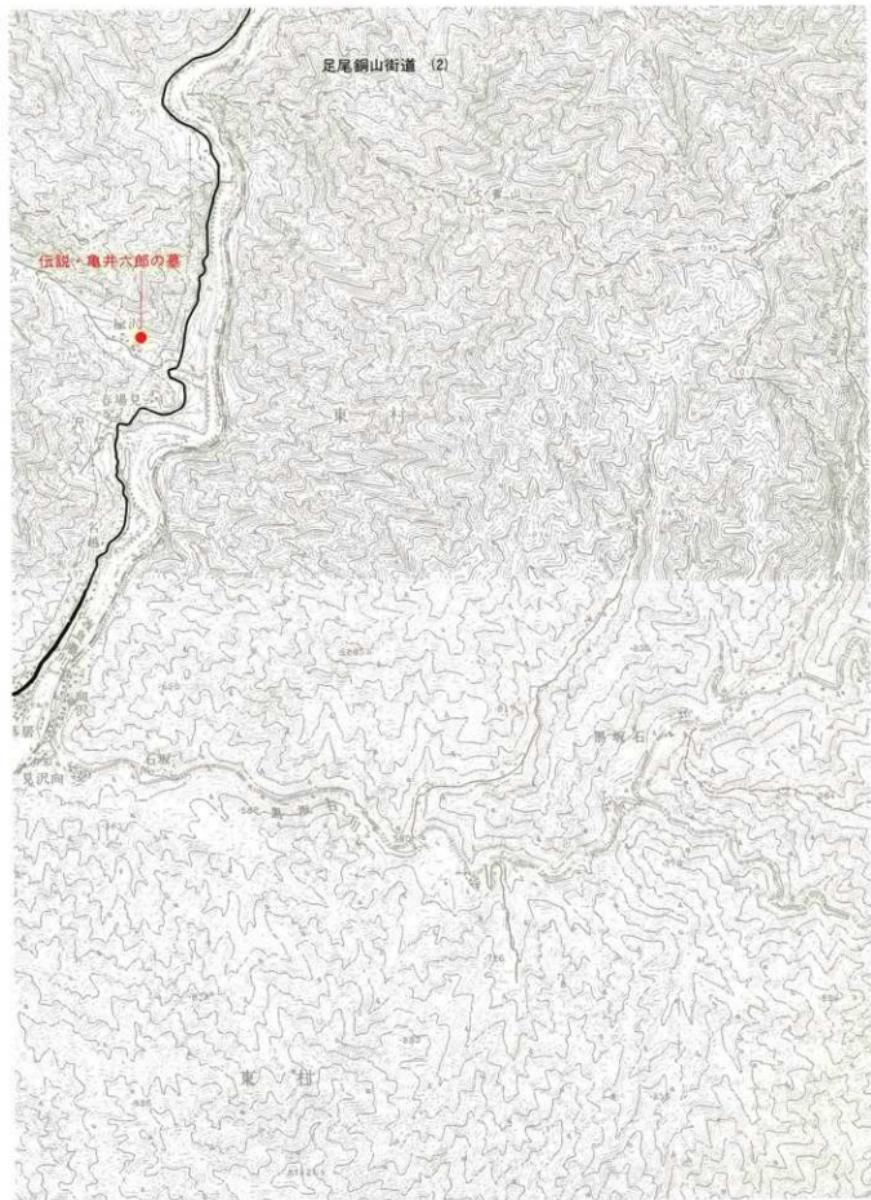


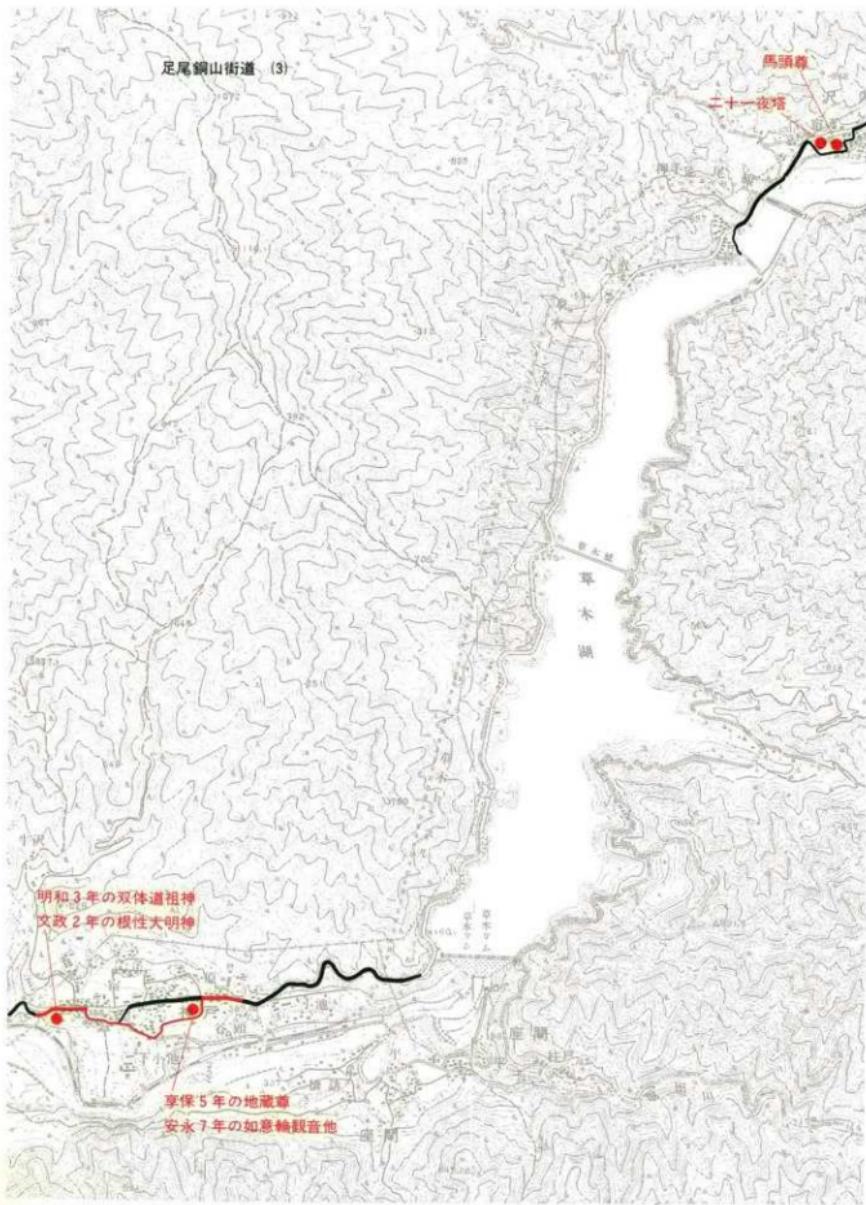
銅藏一河岸の大通

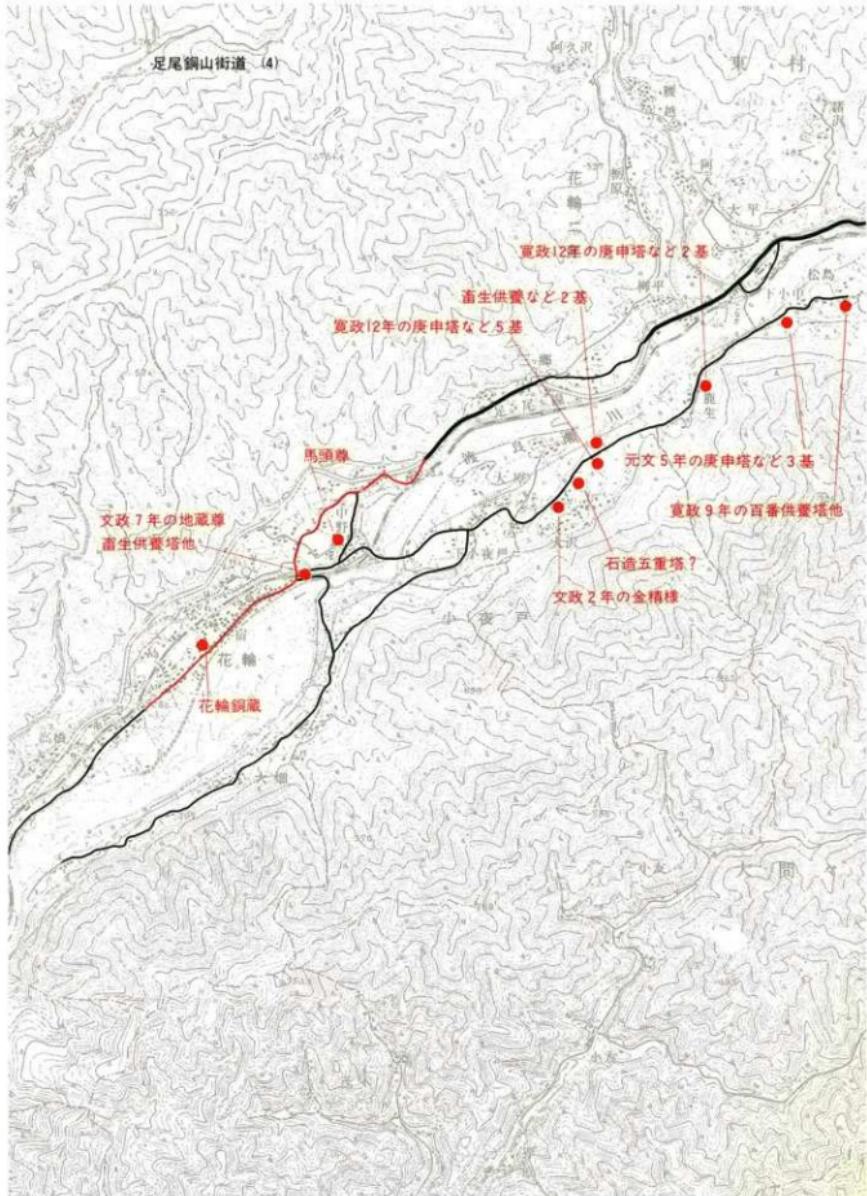




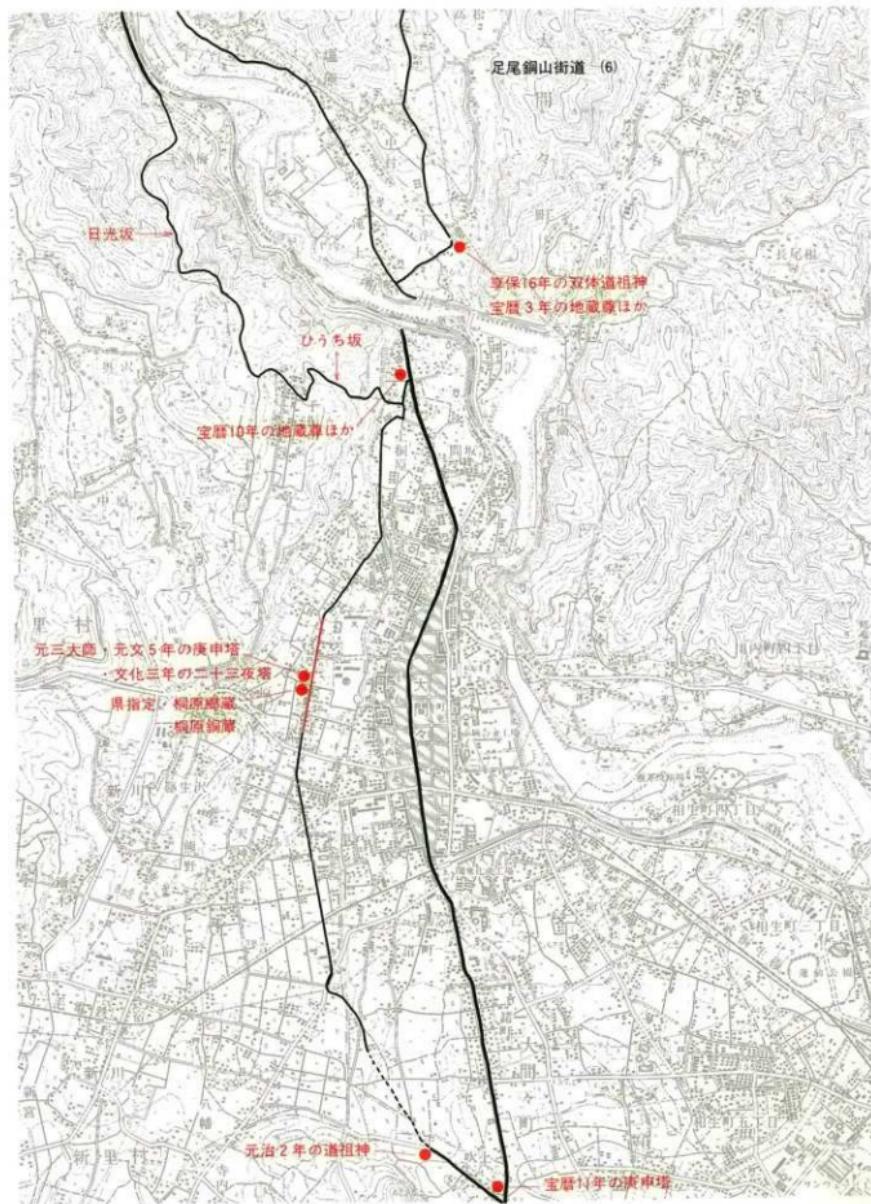
足尾銅山街道 (2)

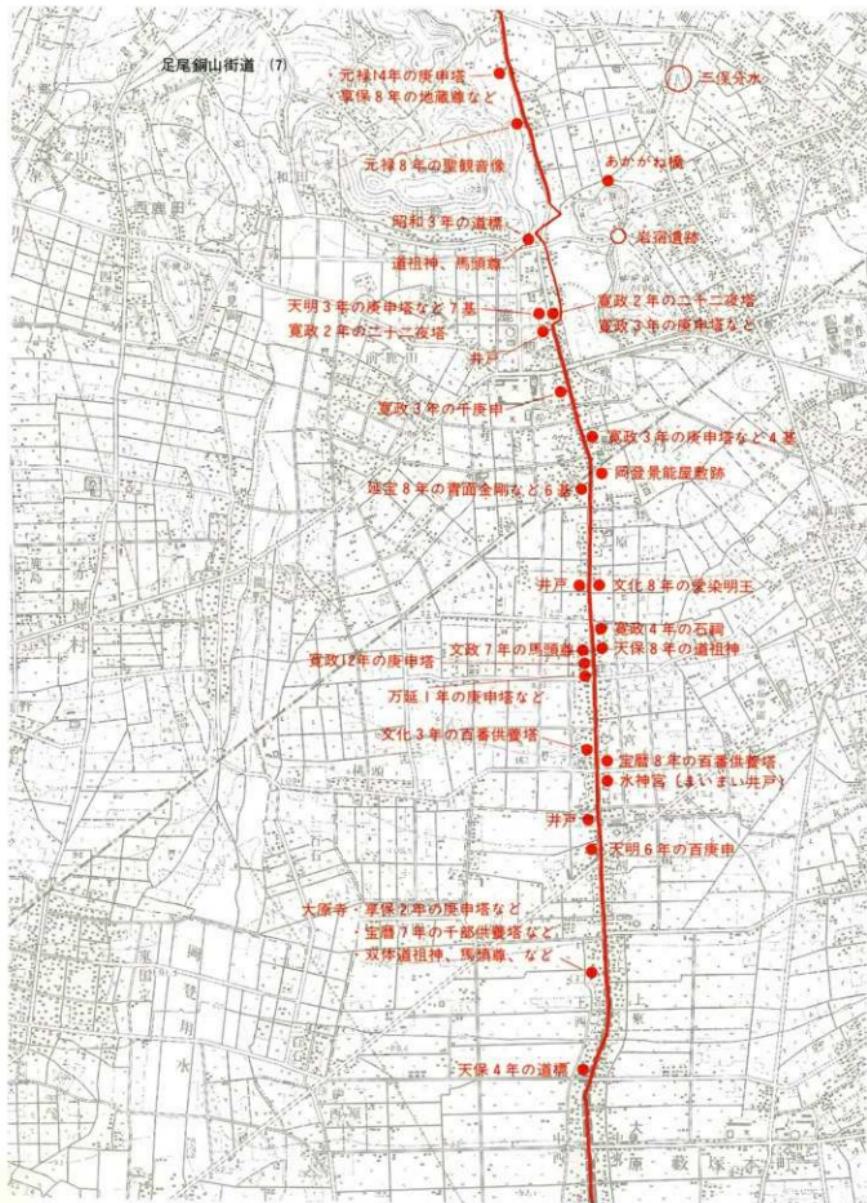


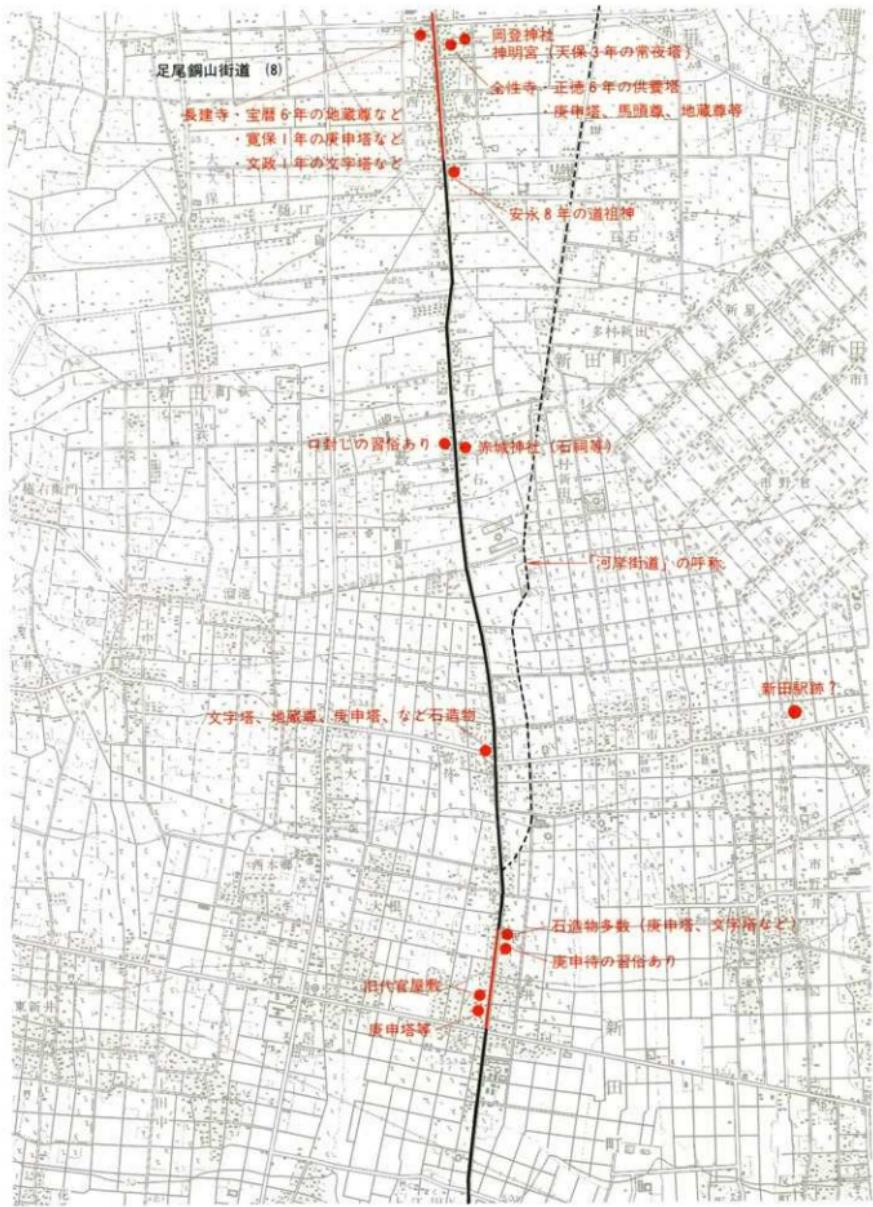


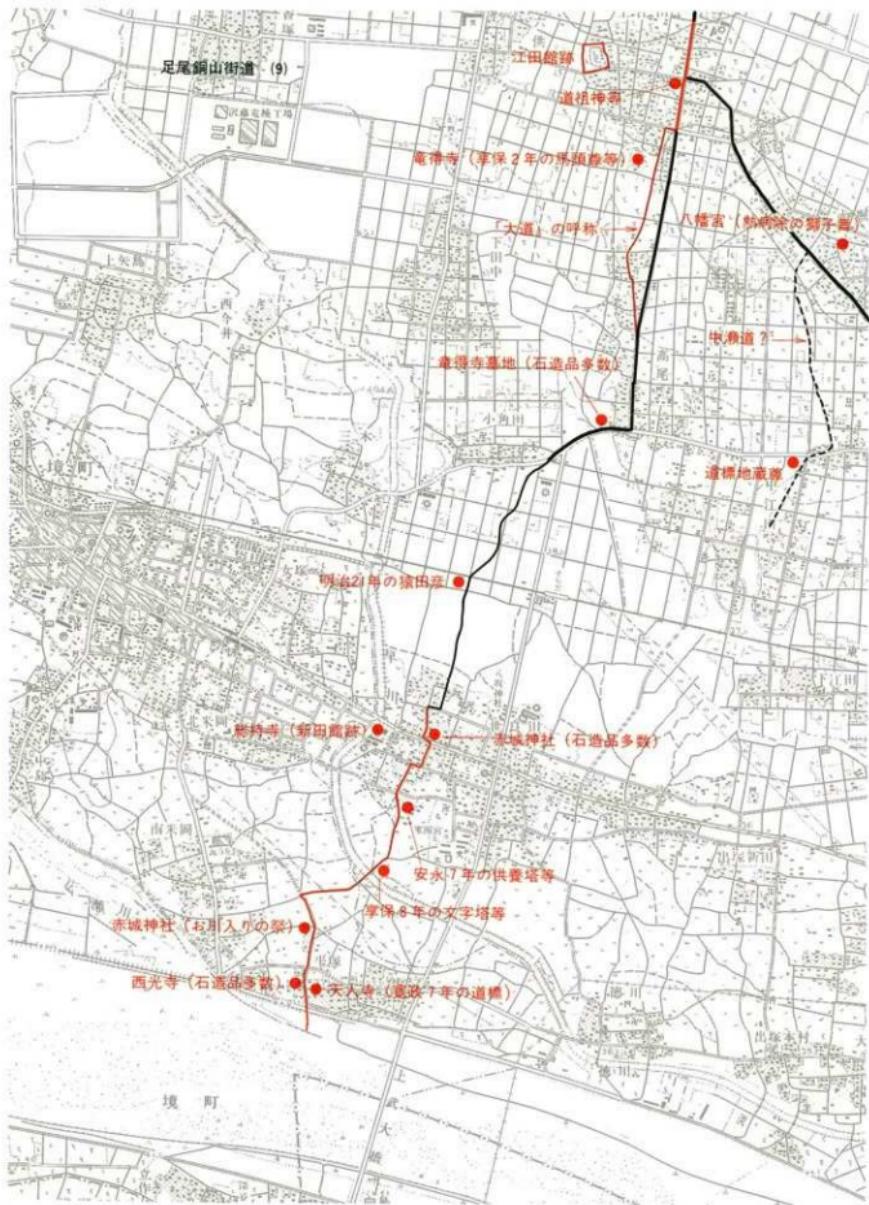


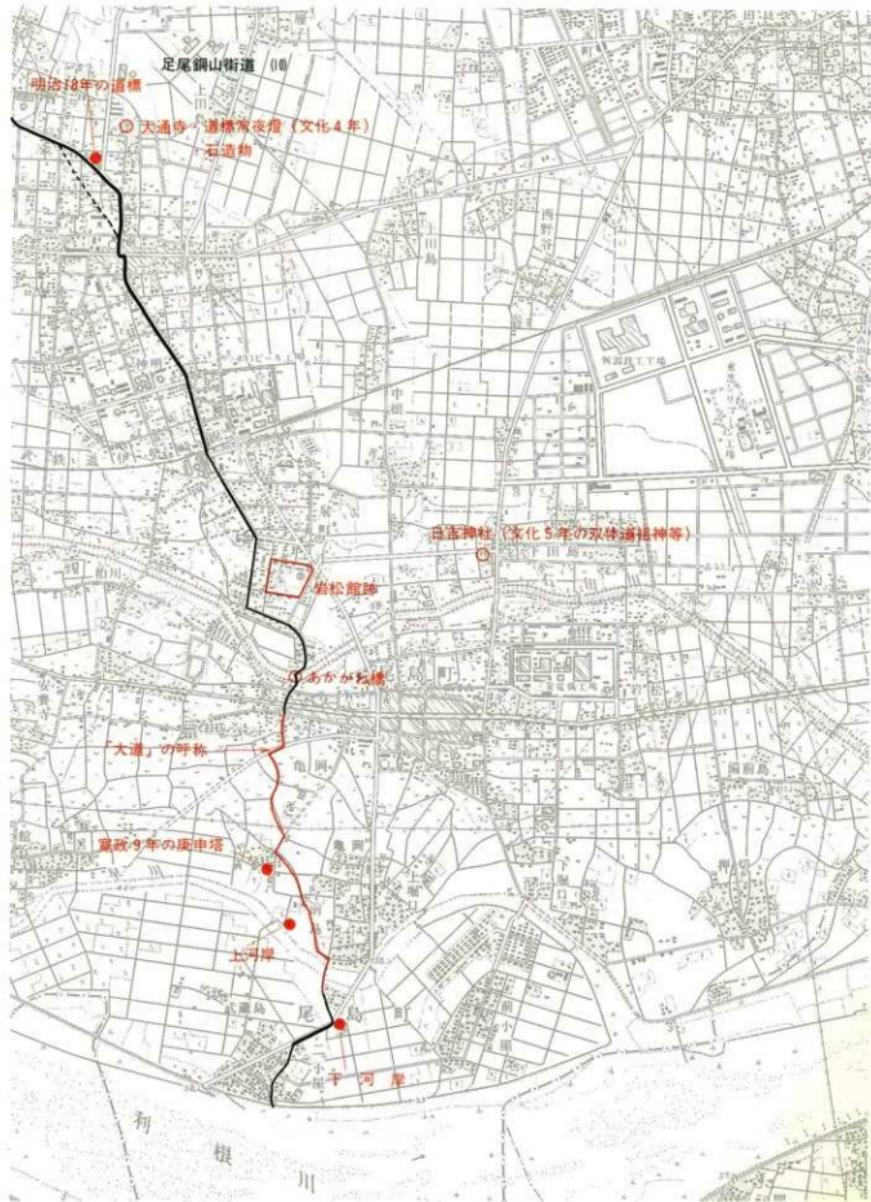












III 文化財等の説明

1. 銅街道と地形

足尾から大間々に至るまで、銅街道は渡良瀬川の谷を走る。渡良瀬川沿岸には、河岸段丘と呼ぶひな段状の地形が2~3段、比較的連続して発達している。河谷の集落や耕地、道路は、すべてこの狭長な段丘面上に立地するのである。銅街道もその例外ではなく、神戸一小中間、水沼付近、下神梅一桐原間そして水沼から塩沢へ抜ける峠越えをのぞけば、すべて渡良瀬河床より数m~50m高い段丘面上を通じている。

神戸から小中の小中川合流点の間は、山麓が直接川岸に迫るため、これを避けて太郎神社の前から川岸へ下りる。水沼の小黒川合流点付近も、水沼側の段丘差が切り立っているため、かつては通行不可能であったろう。そのためか最左の銅街道は、小黒川を少し廻して閑守で小黒川を渡り清水へ出た。清水から宿廻まで、土地の人が日光街道とよぶ道は広闊とした赤城火山の裾野斜面を横断する。2番目に開通した銅街道は、花輪から小黒川を渡って水沼に至り、津久瀬から赤城火山裾野の末端急崖の麓を縫いながら宿廻に達した。ここで深沢川を渡ると、上神梅から下神梅までは再び段丘面上である。下神梅から桐原までの渡良瀬右岸は断崖を成すため、日光坂を登る山道を経て桐原に下った。一方、中神梅から渡良瀬左岸の段丘面、下ノ台へ渡河するルートは、上ノ台をへて滝ノ上に至り、ここで再び渡良瀬川を渡って桐原へ向った。水沼から塩沢へ峠越してきた道も、滝の上でこれに合流する。

ところで、各ルートの使用年代、期間、頻度など重要な事項が明らかになっていない。いま、そのことを不間にしてルート全体を見ると、銅街道が渡良瀬川を渡河する地点が5ヵ所、峠越えないし山道が2ヵ所ある。渡河地点は上流から①小中~小夜戸、②小夜戸~花輪、③花輪~大畠、④中神梅~下ノ台、⑤滝ノ上~上桐原である。渇水期はよいとして、梅雨から台風、秋霖にいたる増水時にはどのように渡河したのであろうか、全く調べる余裕がなかった。また、一番新しいルートといわれる水沼対岸の下八木原から塩沢へ抜ける峠

越えの場合、峠の山道は馬背ではなく、人夫の背で運んだという話が伝わっている。下神梅から桐原への山道はどうだったのだろう。これらのことも含めて、かんじんの御用銅輸送の具体的姿はほとんど知ることができなかった。

2. 前島河岸

足尾御用銅の船積港は、元禄年間(1688~1703)に平塚河岸から尾島の前島河岸に移った。前島河岸は、安永5年(1776)の上利根川14河岸仲間の1つで、船積問屋が8軒あった。

明治17年測量の「妻沼」図幅で前島付近を見ると、利根川が二ツ小屋東部で2本に分岐し、左派川が大きく北へ湾入している。(付図)そして前島河岸は、支流の石田川河畔に位置する。しかし、二ツ小屋集落の東側に堤防があることから、以前は利根川がもっと二ツ小屋寄りで分派して前島河岸に至り、石田川の流路を流れていたと推定できる。今、前島河岸跡は畠地の真中にある。

3. 岩宿遺跡(笠懸村大字岩宿)

岩宿遺跡は、日本における旧石器(無土器)文化の存在が最初に発見、確認された記念すべき場所である。遺跡は、稲荷山の南麓に位置する。昭和21年、相沢忠洋氏が、当時切通しになっていた関東ローム層の露頭から石器を発見したことがその端緒をつくった。

岩宿遺跡には、文化層が2層確認された。「岩宿I文化層」は、中部ローム層最上部の暗色帶(埋没土壤)に含まれ、ハンドアックス(握槌)、スクレイバー(搔器)、ブレイドフレイク(石刀の破片)などを出土した。「岩宿II文化層」は、暗色帶直上にある板鼻褐色輕石層(上部ローム層の下限を示す鍵層)の上部に含まれる。ここからは切出型石器、スクレイバー・ポイント(石槍)、ブレイドフレイクなどが出土した。現在、遺跡の南側の崖に関東ローム層の地層断面がきれいに露出させてあり、ローム層と旧石器文化層との関係が一目で分るようになっている。またその前に説明をテー

アに吹込んだ解説機が設置してあり便利である。その解説の中で「せきどそう」というのは「赤土層」、つまり関東ローム層の通称で、「あかつち」と呼ぶのが正しい。

4. 大間々扇状地の扇端湧水群

大間々扇状地は洪積世に渡良瀬川が形成した開析扇状地である。扇状地は、厚い砂礫層で構成されているため地下水位が深い。地下水位は、扇央部が最も深く、扇端へ向ってだいに浅くなる。扇央の久官では夏季に13m、大原でも10~8mもあるが、扇端ではついに湧水となって地表に湧出する。

湧水帯は、海拔50~60mの間、新田町北部を中心には境町東新井、東は太田市寺井まで東西約8kmの帶状地域をなす。ここに大小約50の湧水がある。湧水のある集落は、寺井、小金井、上野井、市野井、金井、東新井、平井などの地名を付し、湧水と集落立地の密接な関係をもののがたっている。

湧出した地下水は、いずれも南流して、中世新田庄はもとより今日に至るまで灌漑用水源としての機能を果している。湧水を水源とする用水組合が、昭和43年時点にて19組織されていた。しかし、高度経済成長期の機械掘り戸普及により、いくつかの湧水は埋められ、多くの湧水が管理を放棄されて往年の面影を失なった。現在なお活用されている代表的湧水を4ヵ所だけ掲げておく。

(1) 段藏坊 (新田町大字大根)

段藏坊は、扇端湧水群の中で最も湧出量が豊富である。湧水池を「元口」と呼び、數か所の湧水口が盛んに砂を吹き上げている。元口を出た水は、上の沼といふ溜池に貯水され、その後上田中地区約80haの水田を灌漑する。その水は地区的火防用水を兼ねるので、元口や水路、沼の管理は上田中地区が行なう。

(2) 矢太神 (新田町大字大根)

この湧水は、「石田川式土器」で有名な石田川の水源である。湧水は、長方形の溜池である矢太神沼の北東隅にある。湧水の周辺は「矢太神遺跡」とよばれ、繩紋土器を出土する。灌漑面積は約16ha。この東隣にある東西に細長い池は、「上江田用水」とよばれる江戸時代に掘られた人工湧水池である。

(3) 重殿 (新田町大字市野井)

同じ名称の湧水が小金井にもあるが、重殿とは新田義重殿の意と伝える。ここは自然湧水池を掘り下げ、さらに集水暗渠を埋設して人工湧水池化してある。灌漑面積約28ha。

(4) 一の字池 (新田町大字市野井)

生品神社東南にあり、東西に細長い池の形からこの名がある。ところで、元享2年(1322)に岩松政経と大館宗氏との間に用水相論があった。政経の所領島郷は、宗氏所領の一井郷の沼水を往古より引水していたのに、上流側の宗氏方が用水を塞いだとして宗氏を幕府に訴えた。その「一井郷沼水」は、一の字、重殿をはじめ大字市野井にある大小17箇の湧水から流出する水を指している。一の字池も戦後、池床に集水戸井を掘り下げて人工化した。

5. 笠懸野の新田開発と岡登用水

(1) 笠懸野の新田開発

「笠懸野」は、大間々扇状地の扇央から扇端の範囲、現在の笠懸村、戸塚本町、新田町北部を含む地域に対する古称である。扇状地という地形は、厚い砂礫層で形成されているため表流河川がなく、地下水水面も深く、乏水性の土地を成す場合が多い。日本では、近世の新田開発をまつまで、多くの扇状地が未開の山林、原野として放置されていた。

大間々扇状地は、洪積世の古い扇状地で台地化しているために、特に用水を得にくい。岡上景能は、ここへ渡良瀬川から岡登用水を引いて新田開発を行なった。その結果、新設8ヵ村、増開16ヵ村を得た。新設8ヵ村は、野中新田とも呼ばれた。次にそれを示す。

現笠懸村 久宮村、桃頭村

現戸塚本町 大原本町、大久保村、山之神村
六千石村

現新田町 植右衛門村、福池村

増開というのは、既存の村がその周辺を開墾して新田としたもので、野附新田ともよばれた。増開16ヵ村は、次の村々である。

現笠懸村 阿左美新田、鹿川新田、鹿田新田

現戸塚本町 西野新田、戸塚新田

現新田町 上中野、嘉納、市村、四軒在家
小金井新田

現太田市 天良、寄合新田
現赤堀村 間ノ谷新田
現東村 国定新田、田部井新田
笠懸野開発による開拓面積は2,318町歩、新田石高3,740石余といわれ、402戸が移住入植したとされる。新田開発の方法は、請負制によったと考えられている。新田請負衆は10名いたといわれ、農民は彼らから土地を買って入植した。寛文12年の笠懸野御新田請負手形に記された入植者11名の出身地からみると、周辺農村からの入植が多かったようである。

(a) 久宮、新設8ヵ村の1つ久宮村は、5間幅の銅街道の両側に間口15間、奥行320間の銅街道に直交する短冊型地割になっている。創設時、街道に面して井戸を掘ったと伝えられ、岡登井戸とよばれるものが2井現存する。久宮の地下水位は深く、夏で10~13mもあるため、つるべ井戸の時代には“久宮へは嫁にやるな”といわれたという。

(b) 大原宿 大原は新設8ヵ村のうち最も規模の大きい集落である。大原宿には足尾銅山で中継する銅問屋が置かれた。寛文9年に毎年15万貫の御用銅を運ぶ予定を幕府から当宿へ指示したという。寛文12年(1672)には西庄村左衛門が銅問屋を勤めている。

岡登景能は寛文8年から自刃する貞享4年(1687)まで21年間足尾銅山奉行を兼ねていた。足尾銅山は、景能支配時代に最盛期となり、別子銅山に次ぐ大銅山であった。慶安2年(1549)幕府は銅(山)街道を設け、宿駅毎に御用銅問屋を置いた。問屋は沢入、花輪、大間々、平塚に設置された。当時大原宿はまだなく、銅は大原東方の河岸街道を輸送道路としていたらしい。笠懸野開発は、銅街道整備の関連事業とみることもできる。

大原宿の地割は、南北18町、東西約23町、その中央を銅街道が南北に走る。銅街道は中央部12町が7間幅、その南北各3町は5間幅。そして3町毎に3間幅の道を東西に通し、俗に七五三の町割といわれる。また、街道に面して60間ごとに東西交互の千鳥に井戸を配した。今、岡上(様の)井戸と伝えられるものが数箇残存している。夏季地下水位は、8~10mである。

1戸の地割は、間口10間、奥行700間、街道に直交する短冊型で、宅地を合わせて3町3反ずつに配分した。土地は屋敷に統いて竹藪、菜園、普通畠、山林に利用

され、山林の外側に七百間尻とよぶ南北の道がある。屋敷の西と北には防風林を配し、竹藪寄りの菜園に墓地がある。この町割は、寛文12年以前に完了したと考えられている。

(c) 大久保 集落規模は大原の半分くらいであるが、地割形態をよく残している。3町毎に3間幅の道、20間毎に6尺道が通る。1戸の地割は、間口20間、奥行120間の短冊型。地割は寛文12年に完成したと推定されている。

(2) 岡登用水

岡上次郎兵衛景能は、笠懸野の新田開発のために渡良瀬川から岡登用水を開鑿した。用水路は寛文9年(1669)着工、同12年竣工とされるが、既に9年にはほぼ完了したとする見解もあって定かでない。

取水口は現桐生市麻町地先の渡良瀬川右岸にあったといわれる。水路は、岩宿北部の三俣分水まで約2km流れ、ここで阿左美沼方面と鹿川沼方面に分岐した。鹿川沼に入った用水は、銅街道沿いに久宮、大原へ南下してその宿用水となり、流末は溜池村に築造された貯水池へ落としたといわれる。

しかし、本用水の水事情は相当厳しいものであった。寛文12年、渡良瀬川用水懸りの既存村々と取交わした「笠懸野新聞場水取證文」を見ると、取水期間は9月から翌年3月までと限定され、需要期の4月から8月までは「間口に高三尺之戸をたて置、水門の前後築ニ留之 越水之分許 可取之者也」と制限されている。

景能は貞享4年に自刃し、用水も廃止されたといわれるが、既に延宝年中(1673~80)に廃止されたともいわれる。用水機能を発揮する間もなく放棄されたらしい。幕末にいたり戻塚など関係村々が再興願を出したが、安政2年(1855)に天王宿、下新田(現桐生市相生町)までの水路が再興した。今日の水路は、明治6年、阿左美、戻塚、西野、成塚、鹿田5ヵ村によって再興されたものである。現在は高津度狭北端の県営発電所ダムから直接取水している。

6. 神社

(1) 赤城神社

銅街道沿線には多数の神社が分布するが、数の上で最も多いのは赤城神社である。

赤城神社は、雄壯な山容を誇る赤城山を神として祭っ

たもので、後に大沼、小沼の赤城沼神の信仰が加わった。赤城神は、9世紀に從五位下の神位を授与され、続いて赤城沼神も從四位上に授けられた。

赤城神社という名称を記した最古の文献は、延喜式の神名帳である。神社は上野12社の1つとして古代国家の手厚い保護を受けた。中世には地方豪族、とりわけ戦国武将の崇敬と支持を得ていた。宮城村三夜沢にある本社殿には室町時代に新殿が建立されて東宮、西宮と呼ばれるようになった。また、平安時代からは、赤城山に修験者が入るようになった。

赤城信仰は、本来山岳信仰であったが、江戸時代に入るとその性格が大きく変わる。祭神には大己貴命、少彦名命、日本武尊、豊城八彦命、天照大神、大山祇命を祭るようになった。そして、各地に赤城講という庶民の信仰団体が結成されて、赤城神社への信仰と参詣は一大発展をみるにいたった。赤城講は、本社の社家の布教活動によって結成された。かくて17世紀前半の赤城信仰圏は、上野、武藏、下野、下総、越後、信州、奥州（福島・宮城）にわたる地域に拡大した。

赤城講の結成地には赤城神社を祭った。江戸末期に圈内に勧請された赤城神社は383社といわれる。昭和15、16年の赤城神社の分布地域は、江戸時代とほとんど変わらず、県内118社、他県73社、合祠または廃止となったもの141社、合計332社を数えた。

当初、上野の一地方神であった赤城信仰のこのような発展は、信仰の性格を農業中心に転換して農村、農民へ浸透することによって成し遂げられた。したがって、赤城神社本社の祭事には、修講会、養蚕祭、簡刹の神事、嵐除祭、祈雨祭といった農業のまつりが行なわれるのである。しかし、農村を基盤とした赤城講は、明治に入って衰微し、大正時代にはほとんど姿を消してしまった。

(2) 東宮神社

祭神は経津主神、菅田別命、火産靈神。上野一の宮、貫前神社の東方にあるので東宮神社となづけたといふ。明治40年、沢入字山口の愛宕神社と宇細ヶ谷の八幡宮を合祀した。祭日6月15日。

(3) 太郎神社

祭神は田原太郎忠広、菅田別命、大山祇命、楠御気野命、武御雷命。明治42年村社。八幡宮、熊野神社、鹿島神宮等を合祀する。当地の高瀬氏は、祭神田原家

の子孫と伝えられる。祭日8月15日。

(4) 鳥海神社

祭神は安部宗任。祭日6月15日には奉納しし舞いが行なわれる。宗任が瓢のつるで足をとられ、もうこしで目をついて負傷した故事により、当地字大平ではもうこしをつくらないと伝える。

(5) 畠郷神社

菅田別命を祭る。明和5年に再建した。八幡宮など無格社5社を合祀する。境内に文政2年銘のある立派な陽石がある。

(6) 赤城御靈神社

祭神は大己貴命、菅原道真、吉備真備。伝によれば、鎌倉権五郎が祭られていて、小中の鳥海神社と安部宗任と争ったといわれるが、祭神名には見えない。

(7) 天狗様

沼田の迦葉山から分祀したと伝えられる小祠であるが、現在でも足尾町からお参りに来る人がいる。銅街道時代からの結びつきを想定させる。

(8) 赤城神社（下田沢）

祭神は大己貴命他16柱にのばる。これは明治41年に本社他7社と各々の末社37社を合祀した結果である。文化14年銘の石鳥居と寛政5年銘の石灯籠がある。鳥居の手前に安永7年の双体道祖神がある。最初の銅街道は、この社の前を通ったといい、土地の人は「日光街道」と呼んでいる。

(9) 赤城神社（前田原）

十二山神社を合祀する。9月19日（おくんち）の奉納獅子舞が昭和50年ごろから復活した。

(10) 譲訪神社

祭神は建御名方命。8月26日のお祭には、城地区の子供の奉納相撲が古くから行なわれている。

(11) 六合神社

祭神は菅原道真。この天神様に赤城、近戸、山王、三社宮、金比羅を合祀したので六合神社と改称した。

(12) 神梅神社

祭神は大日要命。

(13) 貴船神社

祭神は高湯加美神ほか10柱。大字塙原の赤城神社、同末社8社および本社境内末社2社を合祀する。由緒不詳であるが、山城国愛宕郡鞍馬村の官幣中社貴船神社を分祀したものと伝えられる。近年、初詣ならびに

学業成就祈願絵馬奉納が増加している。

(4) 塩原神社

村社。品陀和氣命ほか17柱を祭神とする。社伝によれば、嘉暦3年高守忠國の創立という。明治40年、本社末5ほか7社15末社を合祀した。

(5) 琴平宮

祭神は大物主神。社殿のある小丘は古墳。境内に愛宕社がある。

(6) 八宮神社

祭神は品陀和氣命、大穴牟遲神。境内に愛宕社、八幡宮、大山祇神社、菅原社がある。

(7) 稲荷神社

世音寺山門の横にある。祭神は宇迦之御魂神。境内に熊野、八坂、日枝3社がある。

(8) 神明宮

郷社。祭神は大日靈命と豊受姫命ほか21柱。慶長2年、当地の氏子が伊勢内宮より勧請して仮屋を営み、正徳5年外宮より豊受姫命を勧請合祀する。当初、高津戸峠谷伊勢ヶ淵の岩上にあったが慶長4年現地に遷座した。寛文13年青山市郎右衛門施主にて、境内の八幡宮を合殿に祭つて再建した。天保7年領主酒井石見守の祈願所となり、領分1町18ヶ村総鎮守として内勅化許可される。本社の2末社および2社6末社を合祀する。

(9) 伊勢ヶ淵弁天宮

市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命を祭神とする。慶長4年神明宮を伊勢ヶ淵から現地に遷座したとき、その守護神として祀られた。

(10) 要害神社

要害山(284.3m)の山頂にある。大物主神他9柱を祀る。もと琴平宮と称したが、明治40年に赤城神社2社およびその8末社を合祀したとき要害神社と改称した。要害山は、天正6年由良氏に落された里見氏の高津度城址で、神社のある場所は旧本丸にあたる。その南の2段の平地は順に二の丸、三の丸。神社の西と北をめぐる狭長な平地は腰郭である。

(11) 稲荷神社

有名な岩宿遺跡のある稲荷山山頂にある。宇迦之御靈命をまつる。拝殿のにつかに「宝暦六年丙子九月再建」とある。境内には天明、天保年間に奉納された歓灯が多く、また宝暦、文化銘のある石鳥居が三の鳥居まで

ある。当社は養蚕の神として信仰され、年2回大祭を行なう。2月初午のときは、地区の養蚕農家が繭玉を作り奉納し、これを借受けて秋の大祭のとき信にして返す慣習があり、今日なお盛んに行なわれている。

(12) 愛宕神社

火產靈命を祭神とする。11月24日の愛宕精進祭のとき奉納相撲が行なわれる。子供の相撲なので祭日に近い日曜日に行なう。

(13) 赤城神社(鹿田)

祭神は大己貴命、豐城入彦命。境内に享保九年甲辰年八月吉日惣氏子中敬白と刻まれた石鳥居がある。

(14) 百品神社

ひやくしな又はいくしなとも呼ばれている。大穴牟遲命を祀る。境内の石鳥居に享保八癸卯天九月吉日と刻まれている。

(15) 赤城神社(鹿ノ川)

祭神は大穴牟遲命。大正14年愛宕、春日、菅原3社を合祀した。

(16) 神明宮(久宮)

大日靈命をまつり久宮住民の鎮守様となっている。境内の石灯籠に寛政四子の刻みがある。

(17) 神明宮(大原)

郷社。祭神は大日靈命。岡登景能が笠懸野の新田開発にあたって、笠懸野の惣鎮守として勧請し、隣接する全性寺を別当寺とした。

(18) 岡上神社

神明宮境内にある。笠懸野新田開発村の1つとして大原を設置し、その地割を施行した幕府代官岡上治郎兵衛景能を祭神とする。創建は明らかでないが、別当寺の全性寺に宝暦2年9月29日付の神祇道管領ト部氏から顕信靈神の靈号授与の旨意があるので、このとき神社に祀ったものと推定されている。昭和49年に岡登景能公顕彰三百年祭が挙行され、社殿を新築した。本社地には明治19年建立の岡上景能公碑がある。

(19) 生品神社

延喜式上野神明帳に新田郡從三位生階明神とあり、大己貴命を祭神とする。境内の周辺は、国指定史跡「新田義貞兵伝説地」で、旗塚塚、床几塚がある。毎年5月8日に義貞兵の故事にちなみ「鏑矢祭」が氏子によって行なわれている。

(3) 八坂神社

世良田政義の外孫良王君由縁の津島天王社の分靈を勧請奉祀したと伝える。7月24~25日の祇園祭は、秋父妙見祭とならんで関東の2大祭と称された。附祭りの舞台車（祇園屋台）は、町内各区に1台ずつ11台あり、内4台を町の重要文化財に指定している。社宝に岩松氏の紋章のある神鏡、初代康延継の神刀などがある。境内新額殿には武術者の奉額が数面あり、拝殿左側には念流3道場の1つ田井源兵衛の奉額がある。拝殿内には金井鳥洲の弟研香の絵馬（安政4年）と国学者師岡節斎の歌額（明治19年）がある。歌は自然石に刻まれて社殿後方にある。また境内および参道西側毛呂氏邸内には芭蕉句碑がある。

(4) 東照宮

天海僧正が家康の下命で長楽寺再建にあたったとき、天海が勧請して日光東照宮の旧社殿を当地に移した。社殿は、2代将軍秀忠が元和年間に建てたもので、寛永21年10月11日移建完了して遷座式が行なわれた。以来、幕府の尊崇あつく、社殿修理は一切幕府の手でなされた。寛永年中には火防役という制度を設けて火災に備えた。明治8年神仏混淆禁止令によって長楽寺から分離独立して郷社となった。本殿、拝殿、中門（唐門）の3棟および太刀銘了戒の4点が国指定重要文化財。板面著色三十六歌仙図36面は県指定重要文化財である。

(5) 赤城神社

新田一族の洪沢氏が創祀した。嘉永6年再建の本殿は、境町重要文化財に指定されている。本殿は下澤名の名彫工弥勒寺音次郎、音八父子が一間社流造り銅葺とよぶ建て方で建造した。本殿の周囲には、音次郎、音八作の立派な彫刻が施されている。本殿正面虹梁に八方睨みの竜、周囲の三壁には天の岩戸、高砂、三韓征伐の彫刻。その下の腰組三壁は六つに仕切られて唐兜彫りが施されている。本殿脇障子左右には、一面に赤壁舟遊、一面に虎渓三笑が彫られ、音八の代表作と称される。なお、7月7日例祭の深夜、御神体を利根川の水で洗い淨める「お川入り」という行事を行なう。これは県内でも珍しい。

(6) 東照宮（徳川）

(7) 八幡宮

新田義重が建久年中に岩清水八幡宮を分祀したと伝

える。8月15日秋の大祭に疫病除の獅子舞（町指定無形文化財）を奉納する。

(8) 花見塚神社

新田義貞夫人、藤原氏一条行房の妹、勾当内侍終焉の地と伝える。勾当内侍遺墳碑（昭和3年建立）にその由来が記されている。義貞の死後当地に来た勾当内侍は、名を儀源院比丘尼と改め、花見塚内の移塚に草庵（後の儀源寺）を営んで隠棲したという。内侍がつづじを植え、自ら観賞したところからこの地を花見塚と称するようになったと伝える。

(9) 菅原神社

通称「前小星の天神様」という。相殿に稲荷大神と海神とを祀る。絵馬（町指定重要文化財）が41面あり、いずれも美術的価値に富む大作である。天保4年金井鳥洲作「寺入り前の天満宮參拝」の絵馬1面がある。寛保2年から慶応3年までのものが25面、明治から大正まで13面、時代不詳3面。

（沢口 宏）

7. 寺院

(1) 大沢寺（曹洞宗）

前橋市橋林寺末。橋林寺14世格山鑑逸を開山とする。古来沢入塔の別當である。尊像釈迦牟尼佛は、押出川右岸中腹にある觀音窟に祀られていたものを、明治維新的ときここに移した。境内に庚申堂がある。

(2) 清水寺と觀音堂

曹洞宗清水寺は、暦応2年、安室文泰が創建し、天文元年、利根郡古馬牧村王泉寺8世洞庵文曹が開山した。境内西にある觀音堂は、清水寺の本尊聖觀世音を明治元年に安置したもので、東三十三所の16番札所である。往時、正月17日の例祭には、近郷の馬を参詣させる慣習でござわった。觀音堂へ登る石段の参道、それに続く石段が美しく、参道入口には庚申塔など石碑群がある。

(3) 大蓋院（曹洞宗）

新里村常光寺直末。天文年間、明巖鑑察の開山。境内に枝垂桜の老木が2本あるが、これは天然記念物クラスのみごとなものである。また、36余の枝を分枝し、直径8m、約50m²をおおう霧島の大株もある。寺は小中の河岸段丘上にあって、枝垂桜ごとにみる眺望は、おそらく渡良瀬河谷隨一と思われる。

(4) 神禪寺（曹洞宗）

大同年間に赤城山麓二の鳥居カジヤ坂地内に天台宗として開創されたという。建久年間、門慶全守が曹洞宗の法席を継いだ。文禄3年、永平寺から家叟殊全入山し、神門の宗風を高めた。元和元年に埼玉県白岡村興善寺6世淨洲雲龍を講じて中興開山とした。本堂は昭和10年秋再建されたもの。四脚門の山門が当山最古の建造物で、元和7年の建立になる。境内にある総神様は風邪の神で、塔上にかけた真綿を借りて首に巻き、全快後新しい真綿を納める。また安永4年本宿の金子庄兵衛寄進の石船がある。墓地には童謡詩人石原和三郎ならびに工学博士今泉嘉一郎の墓がある。当寺の無縁仏塔は、本地域最大の規模を有する。

(5) 善雄寺（天台宗）

比叡山延暦寺の末社。大同元年、伝教大師の法弟曉梅の開基。元和3年、天海僧正が日光登山の折、御朱印11石2斗と上野寛永寺の直木状を賜わる。22世廟慶上人は、義白と号して俳諧をよくしたが、80才のとき生きながら入定された。密薬師がこれである。また、境内にうちわ形の芭蕉句碑がある。伊勢崎在の似塚が善雄寺に来り、義白、似塚と2人を中心には俳諧の席をもうけた記念に芭蕉句碑を建てた（寛政8年）という。なお当寺は、東三十三所観音霊場の23番札所でもある。当寺の無縁仏塔は、祥善寺のそれに次いで大きい。

(6) 医光寺（真言宗）

古代の草創。保延年間に永嚴権少僧都が中興開基と伝える。虚空藏菩薩像（永錄元年田井丹波守納）および虚空藏経の2点が県重要文化財に指定されている。また、智証大師筆、絹地彩色の不動尊画一幅、狩野守明筆、絹地墨絵の觀音画像三幅、保延元年10月10日東光院永嚴鉢の唐銅製鉢1個がある。本堂欄間にには、宝暦6年閑口文次郎有信作と伝える二十四孝像の彫刻が施されている。本尊は千手觀世音で、東三十三所觀世音霊場の第8番札所である。境内には薬師堂と赤城神社がある。赤城神社では9月19日に奉納獅子舞が行なわれる。枝垂桜の老木2本が美しい。

(7) 常鑑寺（曹洞宗）

柏川村膳の龍源寺5世春翁慶陽の開山になる。本尊は正觀世音。東三十三所觀世音霊場の第1番である。本堂の向って左手に県指定重要文化財（昭和19年文部省指定重要美術品）の立派な梵鐘がある。その左奥に

は100余基の庚申塔がある。参道は急傾斜の石段からなり、また本堂前には枝垂桜の老木があり、渡良瀬河谷の多くの寺の中で最も美しい景観を有する。

(8) 正円寺（天台宗）

境内は天正年間の阿久沢城の跡とされる。城主阿久沢能登守の菩提寺として建立されたといわれ、阿弥陀如来を本尊とする。境内西側の墓地には、阿久沢家第7代（寛永14年）から第12代（享保20年）までの墓石が建てられている。

(9) 覚成寺（天台宗）

寛永18年天海直木の補状がある。

(10) 松源寺（曹洞宗）

柏川村膳の龍源寺。寛永8年の伝文當の開山。境内に薬師堂がある。ともに明治16年焼失後再建。

(11) 光榮寺（真言宗）

東京愛宕下町真福寺。慶長8年良瑜の開山。当時は高榮寺と称したが後光榮寺と改めた。寛文年間火災にあい元禄2年再建、弘化4年現本堂を造営した。境内に軀迦堂がある。

(12) 世音寺（天台宗）

延暦寺。永祿14年に創立し、第8世円寛の代に寺を建てたという。境内に地蔵堂、無縁仏塔がある。

(13) 本要寺（日蓮宗）

京都妙顕寺。本立院日要が寛永8年に創立したという。もと京都府上京区禅昌院町にあり、府下愛宕郡柴竹大門の常徳寺であったが、明治25年に妙顕寺に転じ、現地に移転した。

(14) 正福寺（天台宗）

延暦寺直木。創立不詳。貞和5年大阿闍梨義幸が中興開山した。明和、天明年間に隆盛を極めたという。大正7年世良田長樂寺から延暦寺へ転じた。

(15) 清泉寺（天台宗）

重徳良尊の開山。現在の建物は文政8年に改築したものである。作者不明であるが、上野寛永寺ならびに比叡山所蔵のものとともに三幅と伝えられる慈惠大師の画像がある。

(16) 国瑞寺（黄檗宗）

黄檗山第4代管長独湛禪師の開山。岡上治郎兵衛景能開基。景能は本寺のほか戸塚町大原に長建寺・東禪寺を建立している。寺には景能自刃の剣と伝える直刀の剣ならびに景能没後40年享保11年に国瑞寺第8代桃

巖が記した岡登雪江伝一冊がある。また墓地には景能の墓（県指定史跡）がある。墓石正面には、「貞享四年旅丁卯・雪院院殿寿峰道喜大居士位、十二初三日逝」とある。

(1) 臥龍庵（黄蘖宗）

独洪禪師開山の国瑞寺隠居寺である。四天王を併置し、8月7日祇園は「久宮の天王持」として參詣者が多い。このみこしは、厄除として近隣各地へ貸出されていた。

(2) 大原寺（曹洞宗）

貞享年間、太田金龍寺13世龍海の開山。本堂は火災で再建したものを明治15年に修繕している。

(3) 全性寺（真言宗）

貞享4年3月21日創建。新田町大根の大慶寺第15世教寛の弟子舜祐（全性法印）の開山になる。神明宮の別当寺。

(4) 長建寺（浄土宗）

岡上景能が、国瑞寺・東禅寺とともに貞享4年に創建した。太田の大光院より本山京都東山智恩院住万無上人の代證印免許を得て、寛文年間に堂宇を宇樋ノ口に建てた。天和年間これを楽邦寺と改め貞享4年大光院第16代隨營玄察が中興開山となり現在地に移転したという。

(5) 大慶寺（真言宗）

新田義重の娘・妙満尼開基、空覚上人が中興開山。妙満尼は、夫源太義平没後の晩年ここに庵を営み義平を祀り、のちにこの草庵を大慶寺とした。かつて世良田の總持寺、能満寺とともに新田三談林に数えられた。寺域は大館氏の長子、綿打太郎為氏の館趾で二重塁をめぐらせていた。境内には平安末創建と伝える新田不動尊がある。鎌倉時代には新田氏の守不動となつたという。1月28日の祭日は大層にぎわう。また子育地蔵があり、今なお近郷の信仰を集めている。

(6) 龍得寺（曹洞宗）

金山城主横瀬（由良）信濃守泰繁の開基。泰繁の墓石と伝える五輪塔（町指定重要文化財）がある。正面に「龍得寺殿威岳宗虎大居士」、左に「由良信湯守源泰繁」、右に「天文十四年巳九月八日」とある。

(7) 来迎寺（天台宗）

もとは現在地より300m南方にあったが明治元年の火災で当地へ移転した。寺創建時（鎌倉時代末期）

の作といわれる仏頭がある。仏頭（高さ41cm）は、檜材寄木造りの高さ1.8mの阿弥陀如来の頭部であったが、本体は先の火災で焼失した。彫額金泥で顔を塗り、蝶髪は緑青肉髪相、白毫は木をはめこんである。

(8) 清泉寺（天台宗）

頼朝の兄、悪源太義平の墓と伝える石碑がある。石面に「永暦元庚午年 悪源太義平公御廟 六月廿五日」とある。19才で斬首された源義平の首を、源氏由縁の地にある清泉寺に葬ったと伝える。

(9) 總持寺（真言宗）

慶範上人が開山して真光寺、またの名を館之坊と称したが、2世慶賀のとき總持寺と改めた。のちに大慶寺・能満寺とともに新田三談林といわれた。總門は名工弥勒寺音次郎の造営と伝えられる。寺の敷地は、新田義重より義貞にいたる新田氏累代の居館趾と伝えられ、往昔は早川を背にして土壘、水流をめぐらす星城であったという。8月1日に「義貞様」というまつりを行なう。義貞の死を冥するという。このとき祀る義貞様本尊は、鎌倉期の木彫像で、昔から義貞の像と伝えているが、30才代の姿ではないといわれる。

(10) 長樂寺（天台宗）

新田義重の二男徳川義季が開基となり、臨濟宗の名僧崇朝を開山として承久3年後鳥羽上皇の勅願により建立された。新田氏一族が有力な支持者となり・新田氏没後は尊氏はじめ足利一族が支持した。関東に入部した家康は、天海僧正をして長樂寺の再興を下命し寺領百石を寄進した。天海は中興開山と称され、東照宮を勅請した。以後、長樂寺は東照宮の別當寺として榮え、末寺400余、孫末一千余寺といわれた。しかし明治維新によって徳川氏の保護と寺領を失なつたため、明治9年に本堂、書院、表門、鐘櫓、塔頭などを売却あるいは取りこわしてしまった。

当寺には宝蔵があり、開山以来の重要品を藏し、かつて幕府が新井白石を派して調査させた。今日その多くは国および県指定重要文化財となり、毎年11月第3日曜日に謹涼展観に供されている。国指定重要文化財には「長樂寺文書115通」、「絹本着画出山积迦図」「長樂寺宝塔」がある。県指定重要文化財には「永録日記」「東照宮の勅使門」「徳川義季像」など木造人物像3幅、絵画13点・61幅がある。いずれもすぐれた文化財である。

④ 普門寺（天台宗）

寛弘年中、飯室先徳静算開基と伝える。寛永年中に天海が長楽寺に入ったときその末寺になった。由良氏が金山在城のときの祈願所であった。元和寛文のころ岩松家の廟所があったが、元禄12年に長楽寺へ移された。天和年中、岩松富純母慶閑寄進の梵鐘が現存する。境内に雨降地蔵がある。墓地には「上野国志」16巻の著者毛呂権藏の墓（県指定史跡）がある。権藏は世良田村の人・字義卿、全往と号し、寛政4年69才で没した。

⑤ 西光寺（真言宗）

永禄元年、（世良田の總持寺住僧）法印玄海の開山という。当初は宇新井にあったが文久元治のころ利根川の洪水によって流失し永らく荒廃状態にあったが、昭和6年に建在地に再建した。境内に県下最大の馬頭観音塔（天保7年）がある。

⑥ 天人寺（天台宗）

建久5年、慈教上人開山と伝える。元弘3年新田義貞挙兵のとき、莊園若干を寄進して戦勝祈願したという。元亀、天正のころ、金山由良氏と小田原北条氏が利根川をはさんで争う間に兵火にあったという。正徳年中の洪水によって流失して現在地に移転した。寺宝に

雪舟の山水画、狩野法眼の十六善神、英一蝶の人物画などがある。また境内に寛政7年造の道しるべ「右太田、大間々道 左伊勢崎 前橋道」がある。

⑦ 満徳寺（時宗尼時）

鎌倉松ヶ丘の東慶寺とともに吾が国でただ2つの緑切寺であった。開山年時は明らかでないが、建治3年より20年ほど前に世良田頼氏の長女淨念比丘尼が開山したと推定されている。緑切寺満徳寺文書のうち離縁記録など179点が県重要文化財に指定されている。幕府滅亡後、明治初年に廃寺となった。

⑧ 大通寺（曹洞宗）

金山城主横瀬（由良）泰繁の先室、大通寺殿蘭室玄芳大姫の菩提のため、天文2年永平寺19代大拙を開山として建立した。泰繁の先室の墓がある。

⑨ 裏懸寺（浄土宗）

天正7年の安土問答で有名な玉年和尚が元亀年中に開山したと伝えられている。

⑩ 儀源寺（曹洞宗）

新田義貞の死後、当地に来た夫人勾当内侍が儀源院比丘尼と称して開山したと伝えられる。内侍隱棲の当初は儀源庵と称した。当寺は新坂東三十三所觀音順札の第17番札所である。



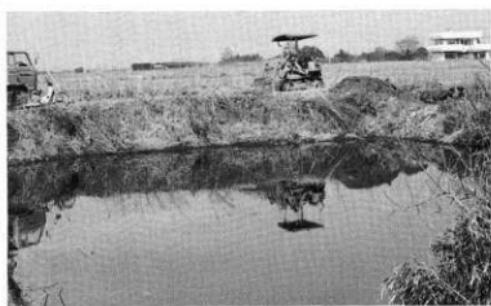
岩宿遺跡



岡登用水



湧水 新田町大根「矢太神」



湧水 新田町大根「段藏坊」



前小屋 菅原神社

尾崎、亀岡 花見塚匂当内侍



赤堀 八幡宮



平塚 赤城神社



徳川 東照宮



世良田 東照宮



世良田 八坂神社



生品 神社



大原 岡上神社



大原 岡上神社と神明宮



高津戸 伊勢ヶ淵弁天宮



大間々 神明宮





大間々 八宮神社



大間々 桐原稲荷神社



大間々 塩原神社

大間々 貴船神社



貴船絵馬



下田沢赤城神社



城諏訪神社



花輪赤城御靈神社



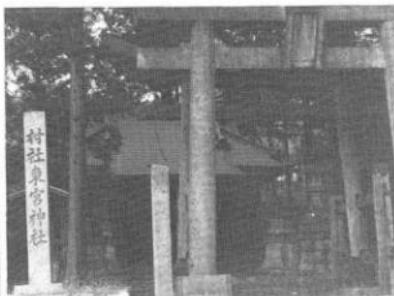
小中鳥海神社



小夜戸豊郷神社



神戸太郎神社



沢入東宮神社

平塚天人寺



世良田長樂寺



世良田 純持寺 新田氏館



世良田 清泉寺



徳川満徳寺



新田町高雄来迎寺



赤堀 大通寺



竜得寺
由良泰繁五輪塔



竜得寺



大根大慶寺



大原全性寺



長建寺



国瑞寺



大間々正福寺



大間々世音寺 無縁仏塔



大間々世音寺



大間々光榮寺



大間々松源寺

水沼 常 鐘 寺



水沼 常 鐘 寺 梵 鐘



阿久沢 正 圓 寺



涌 丸 医 光 寺



花輪 样 善 寺



花輪 样 善 寺





花論 善 雄 寺



花輪 善 雄 寺



小中 大 葦 院



神戸 清水寺西の観音堂



神戸 清 水 寺



神戸 大 沢 寺

IV 銅山街道關係略年表

慶長15年（1610）銅山発見

下野国安蘇郡足尾銅山創草之儀者慶長15戊午年所
百姓治部ト申者内藏ト申者見出シ花輪村彌右衛門
沢入村左十衛門兩人日光座禅院へ申上翌亥年酒井
雅楽頭御取締ヲ以テ間吹銅差上候乍恐
東照大權現様御治世以来大猷院様御持着御祝儀之
砌右間吹銅奉差上候節御代長久吉事之御山と御褒
美御意被^ニ下置候右銅山見立候儀及開播磨國山崎
治兵衛近藤五郎右衛門備前国高橋清右衛門足尾迄
罷越才覚者ニテ山先名代引請大金仕立本国迄罷帰
候由及承候其筋立置候石碑足尾淨土宗大円寺境内
ニ今以有之候其後吉田太郎右衛門ト申者山先相勸
十文字継御免無高而江戸表之儀者官被仰付候
由御座候

寛文3卯年8月25日

御藏守平塚村北爪甚助@
同断大間々村高草木由右衛門@
同断花輪村高草木弥右衛門@
同断沢入村松島左十衛門@
稻葉彦右衛門様御役所

（高草木家文書）

慶長16年（1611）幕府御用銅山となる

寛永4年（1627）天海僧正、第4代銅山奉行となる（在位～正保4）留山となり、天海僧正の經營
一、寛永4卯年より正保4亥迄廿壹ヶ年日光大僧
正御支配午年より十二ヶ年商人亮二被仰付正保
元申より三ヶ年京都町人鶴屋甚兵衛奥田孫兵衛
申者銅山相稼致丁銅勝手次第充払申候

（高草木家文書）

慶安元年（1648）幕府直轄經營御用銅山となる

1.慶安元子年より承応・明暦・万治・寛文元丑年
迄二十五ヶ年御代官諸星庄兵衛様御支配銅山奉行
兼代官御公儀様より銅御用御座候ニ付慶安元子年
三月十九日上野江酒井讃岐守様秋元但馬守
様御上使御成被仰付候ヨリ銅山之儀御公儀様御
台所御用山ニ被成用候ハバ御代官諸星庄兵衛様
同広左衛門様被仰付候由明暦年中御用銅藏相建

候由丁銅ニ仕立直ニ浅草御藏入被仰付其節ヨリ
御貯銅ヲ兼役被仰付候處ニ御座候

（高草木家文書）

慶安2年（1649）街道整備、宿場指定、銅問屋決める

明暦2年（1656）問屋内に銅藏を置く

寛文8年（1668）関東代官岡登景能銅山奉行兼任（第7代）

寛文12年（1672）大原本町（笠掛新田）に問屋設置

貞享4年（1687）足尾銅山最盛期（年産35～40万貫）

岡登景能、笠懸野の開発による下流民の湧水被害
告訴により切腹を命ぜられる

元禄年間（1688～1703）平塚の銅問屋解任、亀岡に新設

御尋ニ付以書付奉申上候

上州新田郡亀岡村御用銅問屋高木左十衛門奉申上
候今般拙者身分之儀御尋御座候此段奉申上候私御
用銅問屋役之儀者之同都平塚村北爪甚助御用銅問
屋相勤罷在候处元禄年中右甚助儀何程不調法筋有
之間屋役並平塚村御用銅河岸迄モ被召離御用銅船
積前島河岸江被仰付平塚者御取置候銅御藏亀岡村
江御移相成問屋役之儀者私先祖高木源右衛門江被
仰付御藏敷五畝歩御年貢御引方相成其之節より苗
字帯刀御免式人扶持被下置夫より引続当私代ニ至
候而茂無瀬問屋役相勤罷在候（以下略）

宝永5年（1708）江戸城普請に銅瓦を鋳造

延享4年（1747）大間々の問屋更迭桐原に新設

一、桐原村之儀者先規より足尾銅山附御用地御座
候處延享三寅年隣郡大間々村酒井雅楽頭様御領
分ニ被仰付候ニ付右村より銅御藏桐原村江御引
移シ大間々村耕場トモ召離レ村順ニ勤方耕場道
法同前ニテ御駄賃等大間々村並其外先規之通り
相勤可申候段御受ケ候申上問屋役儀被付候御用
銅請払仕来申候尤御用之外者請払可仕候

安永5年（1776）倉賀野平塚など利根上流十四河岸、
河岸仲間を作る

文化10年（1813）この頃より產出量激減、銅山は幕府
の間接的經營となる

明治元年（1868）維新にも銅問屋繼續頼出

イ、乍恐以書付奉願上候

上勢多郡沢入村より同勢新田都亀岡村迄五ヶ宿
御用銅問屋共一同奉申上候當國勢多、山田、佐位、
新田右四郡之内村數五十九ヶ村高一万九百三十五
石四斗八匁八才役郷と唱來り當御銅山開闢以來御
銅繼送りハ勿論御陣屋向御破損御修理並宿々間屋
前入用トモ六月十一月兩度ノ割合ニ而高掛出致シ
前々より御用相動来申候然ル處今般御維新ニ付下
野地廻被為遊候趣風聞承知仕候何卒向後者如前上
勢御廻被為仰付度奉願上候尤途中御差支等之御延
出モ被為在候御儀モ御座候ハバ私共迄被仰付候得

者有無一村限り早速取調可奉申上候間右願之通御
聞消被成下置候ハバ広大之御仁慈ト難有仕合ニ奉
存候 以上

新田都亀岡村 高木左十衛門

同 郡大原村 西村金右衛門

山田都桐原村 藤生忠右衛門

右三人代 勢多郡沢入村 御用銅問屋

松島十右衛門

明治元辰十二月 高草木重一郎

足尾銅山御役所

明治四年 銅山經營民営に移される。

あとがき

群馬県教育委員会では、文化庁の指導もあおぎ、昭和53年度文化財保存事業の一環として歴史の道調査を実施したが、従来の調査のように明確な対象がなく、学問としてもしかるべき調査・研究の方法論が確立されてもいないので、調査の実際にあたっては種々困難な点が多かった。このたび報告書を公刊し、調査研究の一端を紹介できたのも、調査員の方々の大変な御尽力のおかげであった。

銅山街道も例幣使街道でも、ごたぶんにもれず車社会を反映して改変が激しく、旧状をとどめる箇所が少なく、景観も大きく変化していた。

そのなかで、銅山街道については、東村の神戸・花輪付近、黒保根村の上神梅付近、大間々町の桐原付近、新田町の金井・上江田付近、尾島町の亀岡付近及び世良田～平塚間に歴史の道としての状態が良く保存され

ていることが報告された。

また、例幣使街道については、玉村及び芝に古い宿場の町割り等が比較的よく残り、その宿場をつなぐ間も文化財が街道筋によく保存され、歴史の道にふさわしい風貌を保っていることが認められた。

これらの勝れた景観や文化財を残している地区も、急速に及んでくる時代の波をかぶり変化をよぎなくされるのも時間の問題になっている。この調査で発見された地域を「一般の利用と後世への保存のために、どういう形で残し、どう整備するか」という本来の目標をどう実現するかが、今後の大きな課題として残された。本書の公刊を機に、多くの方々の示唆がいただければ幸いである。

（文化財保護課）

足尾銅山街道

昭和54年3月30日 印刷

昭和54年3月31日 発行

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町一丁目1の1

TEL 0272-23-1111

編集 群馬県教育委員会文化財保護課

印刷 朝日印刷工業株式会社
